

# 基本計画書

基本計画									
事項		記入欄						備考	
計画の区分		学部の設置							
設置者		ガクウガクイン ヤマシガクイン 学校法人 山梨学院							
大学の名称		ヤマシガクインダイガク 山梨学院大学 (Yamanashi Gakuin University)							
大学本部の位置		山梨県甲府市酒折二丁目4番5号							
大学の目的		本大学は、法令の定めるところに従い法学、商学、経営情報学、栄養学及び国際教養学並びにスポーツ科学の理論とその応用とを教授研究し、広い教養と深い専門の知識をもつ有為の人材を養成することを目的とする。							
新設学部等の目的		スポーツ科学部スポーツ科学科は、スポーツ科学の知と技の修得とスポーツ競技力の向上・実能力の向上を基盤とし、トップスポーツ（競技者のスポーツ）と地域スポーツ（みんなのスポーツ）との好循環システムを推進していくことのできる人材を育成し、国内外のスポーツ振興に貢献することを目的とする。							
新設学部等の名称等	申請学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設の時期及び開設年次	所在地	
	スポーツ科学部 (Faculty of Sport Science) スポーツ科学科 (Department of Sport Science) 計	年 4	人 170	年次人 -	人 680	学 士 (スポーツ科学)	平成28年4月 第1年次	山梨県甲府市酒折二丁目4番5号	
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)		入学定員変更 法 学 部 法 学 科 [定員減] (△20) (平成28年4月) 経営情報学部 [廃止] (△150) (平成28年4月) 経営情報学科 * 平成28年4月学生募集停止							
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
	スポーツ科学部 スポーツ科学科	講義	演習	実験・実習	計	124 単位			
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等	
			教授	准教授	講師	助教	計		
	新設	スポーツ科学部 スポーツ科学科	人	人	人	人	人	人	人
			14 (13)	5 (5)	3 (3)	0 (0)	22 (21)	0 (0)	45 (40)
	分	計	14 (13)	5 (5)	3 (3)	0 (0)	22 (21)	0 (0)	- (-)
		既設	法学部 法学科	11 (11)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	18 (18)	0 (0)
	法学部 政治行政学科		14 (14)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	17 (17)	0 (0)	63 (63)
	現代ビジネス学部 現代ビジネス学科		11 (11)	6 (6)	4 (4)	0 (0)	21 (21)	0 (0)	68 (68)
	健康栄養学部 管理栄養学科		6 (6)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	10 (10)	5 (5)	25 (25)
	国際リベラルアーツ学部 国際リベラルアーツ学科		11 (11)	8 (8)	7 (7)	0 (0)	26 (26)	0 (0)	20 (17)
要	計	53 (53)	27 (27)	12 (12)	0 (0)	92 (92)	5 (5)	- (-)	
	合計	67 (66)	32 (32)	15 (15)	0 (0)	114 (113)	5 (5)	- (-)	
教員以外の職員の概要	職種	専任		兼任		計			
	事務職員	64 人 (64)		55 人 (55)		119 人 (119)			
	技術職員	1 人 (1)		0 人 (0)		1 人 (1)			
	図書館専門職員	6 人 (6)		7 人 (7)		13 人 (13)			
	その他の職員	12 人 (12)		0 人 (0)		12 人 (12)			
計	83 人 (83)		62 人 (62)		145 人 (145)				

注：記入は大学全体

事 項		記 入 欄					備 考	
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用等	計	記入は大学全体 (大学基準面積: 34,600 m <sup>2</sup> )		
	校 舎 敷 地	0 m <sup>2</sup>	84,080 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	84,080 m <sup>2</sup>	共用先: 山梨学院短期大学 (収容定員) 食物栄養科 220人 保育科 300人 (短大基準面積: 5,200 m <sup>2</sup> )		
	運 動 場 用 地	0 m <sup>2</sup>	120,113 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	120,113 m <sup>2</sup>	(基準面積合計: 39,800 m <sup>2</sup> )		
	小 計	0 m <sup>2</sup>	204,193 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	204,193 m <sup>2</sup>			
	そ の 他	0 m <sup>2</sup>	47,189 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	47,189 m <sup>2</sup>			
	合 計	0 m <sup>2</sup>	251,382 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	251,382 m <sup>2</sup>			
校 舎	専 用		共 用	共用する他の 学校等の専用等	計	注: 記入は大学全体 (大学基準面積: 21,815 m <sup>2</sup> )		
	30,813.66 m <sup>2</sup> (30,813.66 m <sup>2</sup> )	9,838.25 m <sup>2</sup> (9,838.25 m <sup>2</sup> )	10,867.00 m <sup>2</sup> (10,867.00 m <sup>2</sup> )	51,518.91 m <sup>2</sup> (51,518.91 m <sup>2</sup> )	共用先: 山梨学院短期大学 (共用する施設: 図書館、 管理棟、守衛室等) (短大基準面積: 4,900 m <sup>2</sup> ) (基準面積合計: 26,715 m <sup>2</sup> )			
教 室 等	講 義 室	演 習 室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	注: 記入は大学全体		
	55 室	33 室	25 室	6 室 (補助職員4人)	2 室 (補助職員3人)			
専 任 教 員 研 究 室	申 請 学 部 等 の 名 称			室 数				
	スポーツ科学部		スポーツ科学科	21 室				
図 書 ・ 設 備	新 設 学 部 等 の 名 称	図 書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 種	視聴覚資料 点	機 械 ・ 器 具 点	標 本 点	大 学 全 体 で の 共 用 分 図 書 311,100 冊 〔64,795 冊〕 学術雑誌 367 タイトル 〔7 タイトル〕 電子ジャーナル 4,686 タイトル 〔4,630 タイトル〕 視聴覚資料 12,292 点 データベース数 18 件
	ス ポ ー ツ 科 学 部 ス ポ ー ツ 科 学 科	7,636 [790] (7,373 [788])	31 [2] (18 [0])	0 [0] (0 [0])	197 (197)	7,636 [790] (7,373 [788])	31 [2] (18 [0])	
	計	7,636 [790] (7,373 [788])	31 [2] (18 [0])	0 [0] (0 [0])	197 (197)	7,636 [790] (7,373 [788])	31 [2] (18 [0])	
図 書 館	面 積	閱 覧 座 席 数		収 容 可 能 冊 数				
	3,984.22 m <sup>2</sup>	494 席		約 31万 冊				
体 育 館	面 積	体 育 館 以 外 の ス ポ ー ツ 施 設 の 概 要				注: 記入は大学全体		
	4,264.00 m <sup>2</sup>	武 道 館		3,008.77 m <sup>2</sup>		武道館: 大学専用		
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経 費 の 見 積 り	区 分	開 設 前 年 度	第 1 年 次	第 2 年 次	第 3 年 次	第 4 年 次	
		教 員 1 人 当 り 研 究 費 等		430 千 円	430 千 円	430 千 円	430 千 円	
		共 同 研 究 費 等		79 千 円	79 千 円	79 千 円	79 千 円	
		図 書 購 入 費	379 千 円	194 千 円	208 千 円	0 千 円	0 千 円	
	設 備 購 入 費	145,659 千 円	33,002 千 円	30,893 千 円	0 千 円	0 千 円		
	学 生 1 人 当 り 納 付 金	第 1 年 次	第 2 年 次	第 3 年 次	第 4 年 次			
1,395 千 円	1,195 千 円	1,195 千 円	1,195 千 円	1,195 千 円				
学 生 納 付 金 以 外 の 維 持 方 法 の 概 要		私 立 大 学 等 経 常 経 費 補 助 金、手 数 料 収 入、等。						

事項	記入欄								備考
大学の名称	山梨学院大学								
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	年	人	年次人	人		倍			
法学部	4	390	—	1,650	—	1.04	昭和37年度	山梨県甲府市酒折二丁目4番5号	
法学科	4	220	—	970	学士(法学)	1.05	昭和37年度	山梨県甲府市酒折二丁目4番5号	
政治行政学科	4	170	—	680	学士(政治行政学)	1.04	平成3年度	山梨県甲府市酒折二丁目4番5号	
現代ビジネス学部 現代ビジネス学科	4	200	—	800	学士(商学)	1.03	昭和40年度	山梨県甲府市酒折二丁目4番5号	
経営情報学部 経営情報学科	4	150	—	750	学士(経営情報学)	0.96	平成6年度	山梨県甲府市酒折二丁目4番5号	
健康栄養学部 管理栄養学科	4	40	3年次10	180	学士(栄養学)	1.22	平成22年度	山梨県甲府市酒折二丁目4番5号	
国際リベラルアーツ学部 国際リベラルアーツ学科	4	80	—	80	学士(国際リベラルアーツ)	0.33	平成27年度	山梨県甲府市酒折二丁目4番5号	
大学の名称	山梨学院大学大学院								
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	年	人	年次人	人		倍			
社会科学部 公共政策専攻 (修士課程)	2	20	—	40	修士(公共政策)	0.87	平成7年度	山梨県甲府市酒折二丁目4番5号	
法務研究科 法務専攻 (専門職学位課程: 法科大学院)	3	15	—	65	法務博士(専門職)	0.40	平成16年度	山梨県甲府市酒折二丁目4番5号	
大学の名称	山梨学院短期大学								
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	年	人	年次人	人		倍			
食物栄養科	2	110	—	220	短期大学士(食物栄養学)	1.04	昭和23年度	山梨県甲府市酒折二丁目4番5号	
保育科	2	150	—	300	短期大学士(保育学)	1.15	昭和42年度	山梨県甲府市酒折二丁目4番5号	
附属施設の概要	なし								

既設大学の状況

法務研究科は、平成25年度より、入学定員を変更  
35→30人(△5)  
平成26年度より、入学定員を変更  
30→20人(△10)  
平成27年度より、入学定員を変更  
20→15人(△5)

# 学校法人山梨学院 設置認可等に関わる組織の移行表

平成27年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員		平成28年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
<b>山梨学院大学</b>					<b>山梨学院大学</b>				
法学部 法学科	220	—	880	→	法学部 法学科	200	—	800	定員変更 (Δ20)
法学部 政治行政学科	170	—	680		法学部 政治行政学科	170	—	680	
現代ビジネス学部 現代ビジネス学科	200	—	800		現代ビジネス学部 現代ビジネス学科	200	—	800	
経営情報学部 経営情報学科	150	—	600			0	—	0	平成28年4月学生募集停止
健康栄養学部 管理栄養学科	40	<sup>3年次</sup> 10	180		健康栄養学部 管理栄養学科	40	<sup>3年次</sup> 10	180	
国際バラルーツ学部 国際バラルーツ学科	80	—	320		国際バラルーツ学部 国際バラルーツ学科	80	—	320	
計	860	10	3,460		スポーツ科学部 スポーツ科学科	170	—	680	学部の設置 (認可申請)
					計	860	10	3,460	
<b>山梨学院大学大学院</b>					<b>山梨学院大学大学院</b>				
社会科学研究科 公共政策専攻 (M)	20	—	40	→	社会科学研究科 公共政策専攻 (M)	20	—	40	
法務研究科 法務専攻 (P)	15	—	45		法務研究科 法務専攻 (P)	15	—	45	
計	35		85		計	35		85	
<b>山梨学院短期大学</b>					<b>山梨学院短期大学</b>				
食物栄養科	110	—	220	→	食物栄養科	110	—	220	
保育科	150	—	300		保育科	150	—	300	
計	260		520		計	260		520	

# 教 育 課 程 等 の 概 要

(スポーツ科学部 スポーツ科学科)

科目 区分	授 業 科 目 の 名 称	配当年次	単 位 数			授 業 形 態			専任教員等の配置					備 考		
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手			
総 合 基 礎 共 生 教 育 科 目	基 幹 ・ 基 礎	法学（日本国憲法）	1・2後	2		○									兼1	
		経済学Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	
		経済学Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	
		人間と科学Ⅰ	1・2前	2		○			1							
		人間と科学Ⅱ	1・2後	2		○			1							
		「基幹・基礎」計（5科目）	—	0	10	0	—		1	0	0	0	0	0	兼2	
	人 間 ・ 文 化	日本の古典の世界Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	
		日本の古典の世界Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	
		音楽と文化Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	
		音楽と文化Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	
		宗教と人間Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	
		宗教と人間Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	
		「人間・文化」計（6科目）	—	0	12	0	—		0	0	0	0	0	0	兼3	
	国 際 ・ 社 会	平和学Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	
		平和学Ⅱ	1・2後	2		○									兼1	
		現代日本文化と東アジアⅠ	1・2前	2		○									兼1	
		現代日本文化と東アジアⅡ	1・2後	2		○									兼1	
		異文化コミュニケーション	1・2前	2		○									兼1	
		「国際・社会」計（5科目）	—	0	10	0	—		0	0	0	0	0	0	兼3	
	環 境 ・ 科 学	生物と環境Ⅰ	1・2前	2		○									兼1	
生物と環境Ⅱ		1・2後	2		○									兼1		
自然の探求Ⅰ		1・2前	2		○									兼1		
自然の探求Ⅱ		1・2後	2		○									兼1		
観光と自然保護		1・2後	2		○									兼1		
観光・ホスピタリティ概論		1・2前	2		○									兼1		
富士山と観光		1・2後	2		○									兼1		
		「環境・科学」計（7科目）	—	0	14	0	—		0	0	0	0	0	0	兼5	
教 育 ・ 社 会	教育と社会Ⅰ	1・2前	2		○									兼1		
	教育と社会Ⅱ	1・2後	2		○									兼1		
	食生活と健康	1・2後	2		○									兼3	オムニバス方式	
	青年と社会	1・2前	2		○									兼1		
	生活世界の探究	1・2後	2		○									兼1		
	心理学Ⅰ	1・2前	2		○									兼1		
	心理学Ⅱ	1・2後	2		○									兼1		
	学校と子どもⅠ	1・2前	2		○									兼1		
	学校と子どもⅡ	1・2後	2		○									兼1		
		「教育・社会」計（9科目）	—	0	18	0	—		0	0	0	0	0	0	兼7	
	「発展・主題」計（27科目）	—	0	54	0	—		0	0	0	0	0	0	兼17		
	小計（32科目）	—	0	64	0	—		1	0	0	0	0	0	兼19		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
外国語教育科目	国際コミュニケーション 基幹・基礎	英語Ⅰ		2		○								兼5		
		英語Ⅱ	1後	2		○								兼5		
		英語Ⅲ	2前	2		○								兼5		
		英語Ⅳ	2後	2		○								兼5		
		日本語Ⅰ (外国人留学生対象)	1前	2		○								兼5		
		日本語Ⅱ (外国人留学生対象)	1後	2		○								兼5		
		日本語Ⅲ (外国人留学生対象)	2前	2		○								兼5		
		日本語Ⅳ (外国人留学生対象)	2後	2		○								兼5		
		「基幹・基礎」計 (8科目)		—	0	16	0	—		0	0	0	0	0	0	兼10
		小計 (8科目)			0	16	0	—		0	0	0	0	0	0	兼10

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
A群	スポーツ基礎演習	1通	4				○		2		1			兼5	
	スポーツキャリア形成	2通	4				○		5					兼1	
	「A群」計(2科目)	—	8	0	0		—		7	0	1	0	0	兼6	
B群	スポーツ哲学(体育原理を含む)	1・2後		2			○							兼1	
	スポーツ史	1・2前		2			○							兼1	
	スポーツ社会学	1・2後		2			○			1					
	スポーツ経営学	1・2前		2			○		1	1					オムニバス方式
	スポーツ心理学	1・2前		2			○		1						
	スポーツ教育論	1・2後		2			○			1		1			
	野外活動・教育論	1・2後		2			○								
	コーチング論(運動学、運動方法学を含む)	1・2前		2			○		1						
「B群」計(8科目)	—	0	16	0		—		3	2	1	0	0	兼2		
C群	スポーツ生理学	1・2後		2			○			1				兼1	
	スポーツ栄養学	1・2後		2			○								
	スポーツバイオメカニクス(機能解剖学を含む)	1・2後		2			○				1				
	体力論	1・2後		2			○			1					
	スポーツ医学	1・2前		2			○							兼1	
	スポーツ傷害論	1・2前		2			○				1				
	情報処理(統計を含む)	1・2後		2			○			3	2				
「C群」計(7科目)	—	0	14	0		—		3	2	0	0	0	兼2		
a科目群	実技実習a1(トレーニング/体づくり運動)	1・2前・後		1				○		1	1				
	実技実習a2(ダンス)	1・2前・後		1				○						兼1	
	実技実習a3(器械運動)	1・2前・後		1				○						兼1	
	実技実習a4(陸上競技:短距離・跳躍・投てき)	1・2前・後		1				○	1	1	1				オムニバス方式
	実技実習a5(陸上競技:長距離)	1・2前・後		1				○	1						オムニバス方式
	実技実習a6(水泳・水中運動)	1・2前・後		1				○	1						
	実技実習a7(スケート)	1・2前		1				○	1						集中
	「a科目群」計(7科目)	—	0	7	0		—		4	1	1	0	0	兼3	
b科目群	実技実習b1(バスケットボール)	1・2前・後		1				○						兼1	
	実技実習b2(サッカー)	1・2前・後		1				○	1						
	実技実習b3(ラグビー)	1・2後		1				○						兼1	
	実技実習b4(ホッケー)	1・2後		1				○	2						オムニバス方式
	実技実習b5(バレーボール)	1・2前・後		1				○		1					
	実技実習b6(テニス)	1・2前		1				○						兼1	
	実技実習b7(ソフトボール)	1・2前・後		1				○						兼1	
「b科目群」計(7科目)	—	0	7	0		—		3	1	0	0	0	兼4		
c科目群	実技実習c1(柔道)	1・2前・後		1				○						兼1	
	実技実習c2(レスリング)	1・2前		1				○	1						
	実技実習c3(空手道)	1・2後		1				○						兼1	
「c科目群」計(3科目)	—	0	3	0		—		1	0	0	0	0	兼2		
d科目群	実技実習d1(野外活動:キャンプ)	1・2・3・4前		1				○	1		1				集中
	実技実習d2(野外活動:水辺)	1・2・3・4前		1				○		1	1				集中
	実技実習d3(野外活動:雪上)	1・2・3・4後		1				○	1		1				集中
	「d科目群」計3科目	—	0	3	0		—		1	1	1	0	0	兼0	
「D群」計(20科目)	—	0	20	0		—		9	3	2	0	0	兼10		
「共通科目」計(37科目)	—	8	50	0		—		13	5	3	0	0	兼13		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門 教 育 科 目	コース共通	スポーツ専門演習1	3通	4				○		6	5	3	0	0		
		スポーツ専門演習2	4通	4				○		6	5	3	0	0		
		「コース共通」計(2科目)	—	8	0	0		—		6	5	3	0	0	兼0	
	競技スポーツコース	a 科目群	競技スポーツマネジメント論	2・3・4後	2			○			3					オムニバス方式
			競技スポーツ情報戦略論	2・3・4前	2			○			2					兼1 オムニバス方式
			競技スポーツコーチング論	2・3・4後	2			○			1	1				兼1 オムニバス方式
			競技スポーツトレーニング論	2・3・4前	2			○			2					兼1 オムニバス方式
			スポーツコミュニケーション論	2・3・4前	2			○			1					
			障がい者競技スポーツ論	2・3・4後	2			○			1					
		「a科目群」計(6科目)	—	0	12	0		—		9	1	0	0	0	兼3	
	b 科目群	競技スポーツ技術論	2・3・4後	2			○				1	1			兼1 オムニバス方式	
		競技スポーツ戦術論	2・3・4前	2			○			1					兼2 オムニバス方式	
		競技スポーツ体力論	2・3・4前	2			○				1					
		競技スポーツ心理論	2・3・4後	2			○			1						
		競技スポーツ傷害論	2・3・4前	2			○					1				
		競技スポーツ栄養論	2・3・4後	2			○								兼1	
	「b科目群」計(6科目)	—	0	12	0		—		2	2	2	0	0	兼4		
	c 科目群	競技スポーツ演習1(マネジメント)	2・3・4前	2				○		1						
		競技スポーツ演習2(バイオメカニクス)	2・3・4前	2				○				1				
		競技スポーツ演習3(ゲーム分析)	2・3・4前	2				○		1						
		競技スポーツ演習4(体力)	2・3・4前	2				○			1					
		競技スポーツ演習5(心理)	2・3・4前	2				○			1					
		競技スポーツ演習6(傷害)	2・3・4前	2				○				1				
		「c科目群」計(6科目)	—	0	12	0		—		2	3	2	0	0	兼0	
	「競技スポーツコース」計(18科目)	—	8	36	0		—		10	3	2	0	0	兼7		
	生涯スポーツコース	a 科目群	現代スポーツ論	2・3・4前	2			○			1					
			生涯スポーツ政策論	2・3・4前	2			○				1				
			生涯スポーツプロモーション論	2・3・4後	2			○				1				
			生涯スポーツマネジメント論	2・3・4後	2			○								兼1
			スポーツビジネス論	2・3・4前	2			○			1					
			スポーツマーケティング論	2・3・4後	2			○			1					
		「a科目群」計(6科目)	—	0	12	0		—		1	1	0	0	0	兼1	
	b 科目群	レクリエーション論	2・3・4前	2			○					1				
		健康体力論	2・3・4前	2			○			1						
		健康心理論	2・3・4後	2			○				1					
		子どもスポーツ論	2・3・4前	2			○					1				
		高齢者スポーツ論(要介護者を含む)	2・3・4後	2			○			1						
		障がい者スポーツ論	2・3・4前	2			○			1						
	「b科目群」計(6科目)	—	0	12	0		—		2	2	1	0	0	兼0		
c 科目群	生涯スポーツ演習1(スポーツプロモーション)	2・3・4前	2				○			1						
	生涯スポーツ演習2(スポーツマネジメント)	2・3・4前	2				○							兼1		
	生涯スポーツ演習3(スポーツビジネス)	2・3・4前	2				○		1							
	生涯スポーツ演習4(子どものスポーツ活動)	2・3・4前	2				○			1						
	生涯スポーツ演習5(高齢者・要介護者のスポーツ活動)	2・3・4前	2				○		1							
	生涯スポーツ演習6(野外活動・教育)	2・3・4前	2				○				1					
	生涯スポーツ演習7(健康運動指導等研修(事前事後指導を含む))	2・3・4前	2				○		1					集中		
「c科目群」計(7科目)	—	0	14	0		—		3	2	1	0	0	兼1			
「生涯スポーツコース」計(19科目)	—	8	38	0		—		3	3	1	0	0	兼1			
「コース科目」計(39科目)	—	8	74	0		—		12	5	3	0	0	兼8			



科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考					
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手						
専門キャリア形成科目	A群… コーチング系	種目別コーチング演習1 (陸上競技:短距離・障害)	3・4通	4				○		1	1						兼1	オムニバス方式	
		種目別コーチング演習2 (陸上競技:長距離・駅伝)	3・4通	4				○		1	1						兼1	オムニバス方式	
		種目別コーチング演習3 (水泳)	3・4通	4				○		1									
		種目別コーチング演習4 (スケート)	3・4通	4				○		1									
		種目別コーチング演習5 (バスケットボール)	3・4通	4				○									兼1		
		種目別コーチング演習6 (サッカー)	3・4通	4				○		1									
		種目別コーチング演習7 (ラグビー)	3・4通	4				○									兼1		
		種目別コーチング演習8 (ホッケー)	3・4通	4				○		2									オムニバス方式
		種目別コーチング演習9 (バレーボール)	3・4通	4				○		1	1								オムニバス方式
		種目別コーチング演習10 (ソフトボール)	3・4通	4				○									兼1		
		種目別コーチング演習11 (柔道)	3・4通	4				○									兼1		
		種目別コーチング演習12 (レスリング)	3・4通	4				○		1									
		種目別コーチング演習13 (空手道)	3・4通	4				○									兼1		
	「A群」計 (13科目)		—	0	52	0			—	9	2	0	0	0	0	兼6			
	B群… 競技スポーツサポート系	競技スポーツサポート演習1 (マネジメント)	3・4後	2				○		1									
		競技スポーツサポート演習2 (バイオメカニクス)	3・4後	2				○				1							
		競技スポーツサポート演習3 (戦術・ゲーム分析)	3・4後	2				○		1									
		競技スポーツサポート演習4 (体力)	3・4後	2				○			1								
		競技スポーツサポート演習5 (心理)	3・4後	2				○			1								
		競技スポーツサポート演習6 (傷害)	3・4後	2				○					1						
	「B群」計 (6科目)		—	0	12	0			—	2	2	2	0	0	0	兼0			
	C群… 生涯スポーツサポート系	生涯スポーツサポート演習1 (スポーツプロモーション)	3・4後	2				○			1								
		生涯スポーツサポート演習2 (スポーツマーケティング)	3・4後	2				○		1									
		生涯スポーツサポート演習3 (子どもスポーツ)	3・4後	2				○				1							
		生涯スポーツサポート演習4 (高齢者スポーツ)	3・4後	2				○		1									
		生涯スポーツサポート演習5 (障がい者スポーツ)	3・4後	2				○		1									
		生涯スポーツサポート演習6 (野外活動・教育)	3・4後	2				○					1						
「C群」計 (6科目)		—	0	12	0			—	3	2	1	0	0	0	兼0				
D群… 教職(保健体育系)	保健体育科教育法1 (体育)	2・3・4前	2			○				1						兼1			
	保健体育科教育法2 (保健)	2・3・4後	2			○													
	介護等体験実習 (事前事後指導を含む)	2・3・4前	2					○		1									
	保健体育科指導論	2・3・4後	2			○			2								オムニバス方式		
	体育科内容・指導論1 (体育理論)	2・3・4前	2				○		1	1	1						オムニバス方式		
	体育科内容・指導論2 (体育実技)	2・3・4前	2				○			2	1						オムニバス方式		
	保健科内容・指導論	2・3・4後	2				○		1										
	学校保健学 (小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む)	2・3・4前	2			○										兼1			
	衛生学 (公衆衛生学を含む)	2・3・4後	2			○										兼1			
「D群」計 (9科目)		—	0	18	0			—	3	4	2	0	0	0	兼2				
E群… スポーツ英語系	スポーツ英語a1 (会話)	2・3・4前	2				○		1										
	スポーツ英語a2 (会話)	2・3・4後	2				○		1										
	スポーツ英語a3 (会話)	2・3・4前	2				○				1								
	スポーツ英語a4 (会話)	2・3・4後	2				○					1							
	スポーツ英語b1 (読解)	2・3・4前	2				○					1							
	スポーツ英語b2 (読解)	2・3・4後	2				○						1						
	スポーツ英語b3 (読解)	2・3・4後	2				○			1									
	スポーツ英語b4 (読解)	2・3・4前	2				○		1										
「E群」計 (8科目)		—	0	16	0			—	1	1	2	0	0	0	兼0				
「キャリア形成科目」計 (42科目)		—	0	110	0			—	13	5	3	0	0	0	兼8				
小計 (118科目)		—	16	234	0			—	13	5	3	0	0	0	兼15				

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
教職専門科目	教職概論	2前			2	○									兼1	集中 集中
	子どもの発達と社会Ⅰ	2前			2	○									兼1	
	子どもの発達と社会Ⅱ	2後			2	○									兼1	
	教育史	3前			2	○									兼1	
	教育課程論	2後			2	○									兼1	
	道徳教育指導論	3後			2	○									兼1	
	特別活動論	2前			2	○									兼1	
	教育方法論	2後			2	○									兼1	
	生徒指導・教育相談	2前			2	○									兼1	
	進路指導論	2後			2	○									兼1	
	教育実習研修	4前			2	○									兼1	
	教育実習Ⅰ	4前			2			○		1						
	教育実習Ⅱ	4前			2			○		1						
	教職実践演習(中・高)	4後			2		○		1	1					兼3	
小計(14科目)		—	0	0	28	—		1	1	0	0	0	0	兼4		
合計(172科目)		—	16	314	28	—		14	5	3	0	0	0	兼45		
学位又は称号	学士(スポーツ科学)		学位又は学科の分野				体育関係									
卒業要件及び履修方法							授業期間等									
<<卒業要件単位>> 124単位 <<履修方法>> 総合基礎教育科目より20単位以上、外国語教育科目より8単位、専門教育科目より必修科目・選択必修科目を含め68単位以上、合計124単位以上を修得。 ○ 総合基礎教育科目については、「基幹・基礎」、「人間・文化」、「国際・社会」、「環境・科学」、「教育・社会」の各区分よりそれぞれ1科目2単位を含め、計10科目20単位以上を選択必修。 ○ 外国語教育科目については、「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「英語Ⅲ」「英語Ⅳ」の計4科目8単位を必修。 外国人留学生は、英語に替えて「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」「日本語Ⅲ」「日本語Ⅳ」の計4科目8単位を必修。 ○ 専門教育科目については、以下の修得要件を充足しなければならない。 (1) 共通科目 次に掲げる修得要件を充足したうえ、計42単位以上を修得。 ・ A群：「スポーツ基礎演習」「スポーツキャリア形成」の2科目8単位を必修。 ・ B群：5科目10単位以上を選択必修。 ・ C群：5科目10単位以上を選択必修。 ・ D群：a科目群より3科目3単位以上、b科目群より3科目3単位以上、c科目群より1科目1単位以上、d科目群より1科目1単位以上を修得し、計8単位以上を選択必修。 (2) コース科目 第2年次の始まるまでに「競技スポーツコース」「生涯スポーツコース」の何れかを選択し、選択したコースに基づき次に掲げる修得要件を充足したうえ、計26単位以上を修得。 ・ コース共通：「スポーツ専門演習1」「スポーツ専門演習2」の2科目8単位を必修。 ・ コース科目：選択したコース(主コース)の「コース科目」より、a科目群より3科目6単位以上、b科目群より3科目6単位以上、c科目群より3科目6単位以上を修得したうえ、計18単位以上を選択必修。 (3) キャリア形成科目 履修モデルに基づき、将来の進路に応じた科目を選択のうえ、計6単位以上を選択必修。 ○ 教職専門科目の履修については、以下のとおりとする。 教員の資質・能力の涵養を目的とするため、教職課程を履修する者のほかは、履修することができない。教職課程履修者(教育職員免許状取得希望者)は取得を希望する免許に必要となる科目は必修。なお、自由科目につき、卒業要件単位数に算入することはできない。 (履修科目の登録の上限：第1年次40単位、第2年次40単位、第3年次40単位、第4年次44単位(年間))							1学年の学期区分	2学期 (前期・後期)								
							1学期の授業期間	15週								
							1時限の授業時間	90分								

# 授 業 科 目 の 概 要

(スポーツ科学部 スポーツ科学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
総合基礎教育科目	基礎	法学 (日本国憲法)	<p>教養としての法の基礎的な知識を概説したのち、憲法の世界の招待状として国政のあり方を定め、われわれの社会生活のあらゆる面にかかわりを持つ基本法である日本国憲法の人権保障、統治機構を概説します。</p> <p>本授業では、主として次のような目標を設定しています。</p> <p>①基礎的な法知識の習得 ②憲法の基本的知識の体系的整理と理解 ③法的なものの考え方の理解</p> <p>なお、本授業は、教職課程を履修する学生には、必修の扱いとなります。</p>		
		経済学Ⅰ	<p>この授業では、経済学を学ぶとき前提となる「経済のしくみ」について講義します。具体的には、景気や物価、財政や金融、国際経済などについて学びます。多くの学生にとって初めての経済学の授業になると思うので、経済理論には深入りせず、経済の動きに関心を持つこと、および、経済制度に関する基礎知識を身に着けること目標とします。なお、各回の授業では演習課題を配布し、その提出をもって出席としますので必ず提出してください。</p> <p>この授業では、次のことを目標として授業を行います。①国内外の経済制度について知る。②経済ニュースに関心を向ける。③経済学とはどのような学問か知る。</p>		
		経済学Ⅱ	<p>この授業では、現代社会が抱える経済問題の分析を通して、経済学の基本的な考え方を学びます。ミクロ・マクロ経済学を概観した後、公共経済学、産業組織論、労働経済学、国際経済学といった応用分野の講義を行います。また、各回の授業では、公務員試験や各種資格試験で出題された問題を演習課題として配布し、問題演習を通して経済理論に対する理解を深めます。</p> <p>この授業では、次のことを目標として授業を行います。①経済学の基礎理論を習得する。②経済理論がどのように応用されているか知る。③各種試験で経済学を学ぶ必要がある学生を授業内外で支援する。</p>		
		人間と科学Ⅰ	<p>メインテーマは、「地球とエネルギーと気象」です。現在の地球の状況を、エネルギーや気象の観点から科学的に理解した上で、それらと関連する社会的・現代的問題についても、理解を深めていくことを目標とします。まず、地球の形や構造についての基礎を学びます。続いて、エネルギー資源に関する問題を、系統的に解説します。さらに、地球規模での気候の変動についての問題を扱います。この授業では、①地球、エネルギー、気象についての基礎知識を習得すること、②授業で取り上げる主なテーマに関して、内容を十分理解し、その要点や、テーマについて論述できるようになること、を目標とします。</p>		
		人間と科学Ⅱ	<p>メインテーマは、「宇宙・地球・生命の起源と歴史」です。第一に、現在生活している地球環境や、われわれ人類を含む生物体のルーツを確認していくことを目標とします。次に、その過程で、宇宙や地球や生命についての基礎知識を身につけることを目指します。それを通して、科学的なものの考え方に慣れ、現代科学の最近の知見がどのように形成されてきたのかを理解できるようになることも、目標とします。この授業では、①宇宙や地球や生命の起源と歴史についての基礎知識を習得すること、②授業で取り上げる主なテーマに関して、内容を十分理解し、その要点や、テーマについて論述できるようになること、を目標とします。</p>		
	発展	人間	日本の古典の世界Ⅰ	<p>J・クラシック (万葉) の人々の歌・恋愛・生活を理解する。私たちは、毎日歌を聴く。それはひとりであったり、コンサートで聴くこともある。歌をロザミ、そして時には踊りながら歌ったりもする。また、私たちは、勝手に替え歌・パロディーも作り、作詞・作曲をするものもいる。路上や駅でギターを弾きながら公衆の面前で歌うものもいる。では、日本の古代の歌は、どのように作られ、詠まれ・歌われたのだろうか。の歌が作られた環境は、どんなものだったのだろうか。そもそも古代の人は、どんな恋愛をし、どんな生活の中から、歌を作っていたのだろうか。これらの点を、万葉歌を中心に理解していく。</p>	
			日本の古典の世界Ⅱ	<p>J・クラシック (万葉) と現代の比較を行う。私たちは、毎日歌を聴く。聞いてみると、(あれっ、どこかでこの曲聞いたことがあるような) などと思うことしばしばである。そして (これってパクリ?) などと思うこともよくある。他の曲と似ている箇所など、曲の構成もすぐ気になるものもいるだろう。もってインターネットでは、パクリを糾弾する書き込みや擁護する書き込みが飛び交う。では、昔の歌は創作的であったのか?パクリはなかったのか?パクリは糾弾されたのか。昔の歌の構成はどのようなものだったのか。似た内容・同様な題の歌はなかったのか。これらの点を、万葉歌を中心に理解していく。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
総合基礎教育科目	人間文化	音楽と文化Ⅰ	幅広い視野で、普段聴かないような音楽を中心に、古典音楽や民族音楽など様々な音楽を、それらが生まれた文化的、社会的、そして歴史的背景を探りながら聴いて行き、音楽を受け身でなく主体性を持って聴けるような体系的教養を培うことを目標とします。この授業では、西洋の古典音楽、所謂クラシック音楽を取扱います。西洋のクラシック音楽は当初、学問として体系的な発展を遂げました。西洋音楽の大きな音楽史の流れを、原点である古代ギリシャから、中世、ルネッサンス、バロック、ウィーン古典派、19世紀ロマン派、そして20世紀まで、各々の時代の社会的背景や音楽以外の芸術文化との関わりを学びます。	
		音楽と文化Ⅱ	アジアを中心とした民族音楽を取り扱います。まず「音楽と文化Ⅰ」の西洋音楽史の延長線であると共に「音楽と文化Ⅱ」の民族音楽への導入として、20世紀のポピュラー音楽の源流であるジャズやロックのルーツを探り、次に世界の民族音楽を日本古来の伝統音楽と深い繋がりのあるアジアの音楽を中心に、中東、南アジア、東南アジア、東アジアと比較しながら学んで、最後に日本音楽史の古典音楽から西洋音楽受容までを概観することによって私たちの日本文化の特性を探って行きます。授業の進行方法は話の中で実際に音楽を聴いて行くことが中心となります。知識としてよりも、体験的に把握することをより重視するからです。	
		宗教と人間Ⅰ	世界中のさまざまな宗教がどのように成立していったのかについて、用意した資料に基づいて講義を行う。そこで明らかになる成立要因を理解することにより、それらが各地域の人間とどのように関わってきたのかを考え、それぞれの本質と存在意義を自分の言葉で語れるようになることを目的とする。世界中のさまざまな宗教がどのように成立していったのかについて、用意した資料に基づいて授業を行う。また各宗教について、授業終了後に概要をまとめて、提出してもらう。この授業では、宗教の起源、宗教の類型を概説した後、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教について取扱う。	
		宗教と人間Ⅱ	世界中のさまざまな宗教がどのように成立していったのかについて、用意した資料に基づいて講義を行う。そこで明らかになる成立要因を理解することにより、それらが各地域の人間とどのように関わってきたのかを考え、それぞれの本質と存在意義を自分の言葉で語れるようになることを目的とする。世界中のさまざまな宗教がどのように成立していったのかについて、用意した資料に基づいて授業を行う。また各宗教について、授業終了後に概要をまとめて、提出してもらう。この授業では、ペルシャの宗教、インドの宗教、東南アジア・チベットの宗教、中国の宗教、日本の宗教を取扱う。	
	国際	平和学Ⅰ	この授業では、第一に平和学とは何かについて考察します。第二に戦争・紛争と平和構築の歴史と理論、第三に災害救護と復興支援について取組みます。なお、授業はおおよそ三分の一を英語で行ないます。戦争・紛争・対立と平和構築をめぐる歴史と実践、理論について、自分なりの問題意識を抱き、その問題の所在を明らかにし、論理的かつ実証的な文章で表現し、簡潔かつ説得力のあるコメントができるようにすることを目標とします。また、授業を通して、バランスのとれた知的センスを養うことをあわせて目標とします。	
		平和学Ⅱ	この授業では、「靖国問題」について概観し、戦死者の追悼をめぐる国際比較を適宜行いながら、そもそも何が「問題」なのかを明らかにします。戦死者の追悼と「靖国問題」への取組みを通して、和解と共生の未来への地平を拓くための実践的方法を考察します。なお、授業はおおよそ三分の一を英語で行ないます。戦争・紛争・対立と平和をめぐる歴史ならびに国際関係論について、自分なりの問題意識を抱き、その問題の所在を明らかにし、論理的かつ実証的な文章で表現し、簡潔かつ説得力のあるコメントができるようにすることを目標とします。また、授業を通して、バランスのとれた知的センスを養うことをあわせて目標とします。	
	社会	現代日本文化と東アジアⅠ	私たちは、毎日歌に接する。このJ・POPは、どのように作られ、そしてどのように売られるのであろうか。さらに、歌手やアーティスト達は、どのように描かれ・PVなどで撮り出され、享受されているのだろうか。また、東アジアとどうリンクしているのだろうか。これらの点を、特にアイドルに焦点をあてながら、視聴覚教材をふんだんに取り入れながら、多角的に考えていきたい。①J・POPがどのようにして作られ、どのようにして受け手に届けられるかを理解すること、②J・POPが東アジアの歌とどのような関係性をもっているかを理解することを、この授業の目標とする。	
		現代日本文化と東アジアⅡ	私たちは、毎日歌に接する。iPodで聴いているのかもしれないし、ラジオから流れる曲をロクさんでいるのかもしれない。TVの音楽番組やDVDを見ているのかもしれないし、コンサート会場でものかもしれない。このJ・POPは、何を歌い、どのように変化してきたのだろうか。また、よく似た歌には、いったいどんな意味があるのだろうか。歌詞内容には、どんな意味や効果があるのだろうか。また、聴取態度によってどのように理解に違いがあるのだろうか。あるいは、東アジアとどのような交流をもっているのだろうか。これらの文化がハイブリット化していく可能性を考える。授業では、視聴覚機器を駆使しながら、多角的に考えていきたい。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
総合基礎教育科目	国際・社会	異文化コミュニケーション	国籍、男女、世代、家庭環境等、異なる文化を有する人と友好的なコミュニケーションをとるスキルを学ぶことを到達目標とします。国際舞台で活躍できるようリーダーの育成も、当科目の目的です。現代世界において各国の「国際化」は避けて通れない道です。日本国内においても外国人の数は増加傾向にあり、外国に渡航する日本人も増えています。そのような中で必要になるのは、異なる文化を有する人々間のコミュニケーションです。多文化共生を目指さなければならぬ現代社会においては、それらを学ぶことは非常に重要です。当科目は、それらのことを視野に入れ、コミュニケーション能力の向上を目指します。	
	環境・学	生物と環境 I	我々人間を含む生物がどのように誕生し、進化したかを過去から現在までの垂直方向から検討するとともに、生物を原子・分子から組織・個体というミクロからマクロの観点で考察し、現在の地球に生きている生物の生態についても理解を深める。さらに人間と環境問題の関わりや微生物が人間に与える功罪についても言及する。我々人間を含む生物は生物間どうし、生物と非生物どうしがさまざまな連携を取りながら、現在の地球という環境の中で暮らしている。本授業では地球及び生命の誕生・進化、生物の構造と働き、生物間並びに生物と非生物間の相互作用、また人間と食、人間とさまざまな環境問題との関わりなどについて学ぶ。	
		生物と環境 II	我々人間を含む生物がどのように誕生し、進化したかを過去から現在までの垂直方向から検討するとともに、生物を原子・分子から、現在の地球に生きている生物の生態についても理解を深める。さらに人間と環境問題の関わりや微生物が人間に与える功罪についても言及する。本授業では、生物と非生物（温度、光、水、酸素、金属）との関わりについて個別に考察するとともに、我々人間の免疫システムや老化・寿命について授業を行う。また、現在大きな話題となっている生物多様性やエネルギー問題、廃棄物処理等について検討する。さらに人間と食の関わりについて、遺伝子組換え作物や食の安全性についても言及する。	
		自然の探求 I	この授業のテーマは「星と宇宙」です。本授業では、太古から伝えられていること・人類が古くから分かっていたこと（勘違いしていたこと）から、現代科学によって初めて明らかになったこと・最前線の研究テーマまでを取り上げ、分かり易く解説して行きます。「星と宇宙」は直接的に人類役に立つ実用学的なテーマではありませんが、この授業を通して、「宇宙の神秘」が受講した皆さんの人生を通しての趣味・興味・探求のテーマとなってもらえればと思います。なお、高等学校で数学・物理学を学んでいる必要はありません。	
		自然の探求 II	この授業のテーマは「物理学」を用いた「自然の探求」です。物理学は古代ギリシアで自然の成り立ちを探求する学問として哲学とともに生まれ、科学の基礎として現代に至るまで発展して来ました。この授業では、科学の原点である物理学を学びます。物理学の基礎的な話から始め、自然現象の解明、普段の生活への係わり合い、最先端の研究成果、未来の可能性へと話を広げて行きます。「物理学」は「なぜだろう？」と疑問を持つことから始まりました。この講義を通して、皆さんが正しい科学の知識を得ると共に、物事に疑問を持つ心を養ってもらえればと思います。なお、高等学校で数学・物理学を学んでいる必要はありません。	
		観光と自然保護	現代の日本経済は「低成長時代」、「歴史的転換期」と言われている。その中で、「観光」が今後の成長の可能性がある分野と言われているが、それはなぜなのかを日本経済の発展段階を概説する。また、「観光まちづくり」と呼ばれる事例を取り上げ、地域の持つ力、身近な所にある資源に目を向け活用する重要性を説明する。日本経済の基礎知識を学んだ上で、観光と自然保護について、農業、自然利用、まちづくりの事例、ニューツーリズム事例などを通じ理解を深めてもらう。その過程で地域資源への多様な視点の持ち方やそれを活かすための企画立案方法などを習得し、今後の研究や実践活動に役立つものとした。	
		観光・ホスピタリティ概論	「おもてなし」と訳される事が多い「ホスピタリティ」について、基本的な理解を深めると共に、観光産業との関係を理解します。観光産業の中でも、旅行業界、ホテル業界、外食業界についての基礎的な知識を深め、これらの業界が発展してきた時代背景や経緯とともに、これからの我が国の観光において、どのような役割を果たすべきなのかを考察します。また将来の進路の選択肢になる様に、業界に興味をもてる題材を織り交ぜながら授業を進めます。ホスピタリティの理解を深め、観光業との関連性を知る。観光業の中でも代表的な、旅行業、ホテル旅館業、飲食業について、そのビジネスの仕組みを理解します。	
		富士山と観光	富士山と富士五湖を主なテーマに、観光と自然保護のあり方や自然との共生、環境教育、広域観光等について学ぶ。また、富士山の世界文化遺産登録の意義や今後の課題等について学び、世界遺産と観光について考える。富士山は、2013年6月に世界文化遺産に登録された。富士山の成り立ちや富士山信仰について学びながら、自然との関わり、世界遺産としての富士山、観光振興、まちづくり、エコツーリズムなどの具体的な取り組みについて考察する。併せて、長野県との県境に位置する八ヶ岳観光圏の取り組みや環境教育についても考察する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合基礎教育 ・ 主社 育科 目	教育と社会Ⅰ	教育は社会的な現象であり社会機能の一つなのである。人間は、社会の発展に貢献しながらも、社会のあり方や動向によって影響される教育の中で成長し発展していく。教育は、人間の望ましい成長発達を促進するものであるから、教育を社会との関連から見つめ直し、人間の成長発達の過程との関連において考えていく必要がある。一方では産業化の発展段階に重点を置く見方や、高齢化社会・少子社会といった人口動態に重点を置いた捉え方、更に高学歴社会・選抜社会といった社会の人材養成と配分の機能に着目した捉え方等いろいろな見方があるが、社会と教育の関係について授業を行う。教育と社会の関係について社会的に把握することが本講座のねらいである。	
	教育と社会Ⅱ	教育は社会的な現象であり社会機能の一つなのである。人間は、社会の発展に貢献しながらも、そのあり方や動向によって影響される教育の中で成長し発展していく。このように、教育を人間の成長発達の過程との関連において考えていく必要がある。一方では産業化の発展段階に重点を置く見方や、高齢化社会・少子社会といった人口動態に重点を置いた捉え方、更に高学歴社会・選抜社会といった社会の人材養成と配分の機能に着目した捉え方等いろいろな見方があるが、社会と教育の関係について授業を行う。本授業では、社会的な観点から今日の教育のいろいろな課題について考えることを課題としている。	
	食生活と健康	本授業では、栄養素の働き、ライフステージの栄養、生活習慣病など、栄養と健康の関わりについて解説し、健康的な生活を送るために必要な栄養の知識を伝達する。また、基本的な食事構成を理解し、食事バランスガイドが活用できるよう演習を行う。本授業では、①栄養と健康について説明できる、②栄養素の役割および、健康増進について述べることができる、③生活習慣と疾患との関連を説明できる、④食品の栄養的特徴についての列挙できる、⑤適切な食事の摂り方がわかり、実施できる、の5点を、到達目標とする。 (オムニバス方式/全15回) (39 古閑美奈子/5回) 1～5回:食生活と生活習慣 (27 吉野 美香/5回) 6～10回:栄養素の働き (36 藤井まさ子/5回) 11～15回:食生活をデザインする	オムニバス方式
	青年と社会	この授業では、主に社会的なアプローチをとりながら、現代日本における青年のおかれた諸状況について検討を加えていく。具体的にとりあげるトピックスは、学校教育と学歴主義、就職、結婚、家庭生活などである。履修者のみなさんが、自分自身の人生のあり方について考えるための手がかりともなる、そんな授業内容になればと考えている。本授業では、①現代社会における青年の置かれた状況について理解を深めること、②それを通して各自が社会の構成員としての自己認識を深めること、を到達目標とする。	
	生活世界の探究	我々の日々営んでいる日常性のあり方そのものが、この授業のテーマである。通常、それは当たり前存在として我々の前に展開されており、そうした日常性の陰にあって、そこに孕まれている問題性や課題というものはなかなか気が付かずにいて、だからこそそれを積極的に疑っていくことによって、そうした日常性のなかに隠れている現代社会の諸構造を浮かび上がらせていくというのが、この授業の目的である。具体的には、家族論や現代社会論として扱われてきたトピックスを中心に切り上げていく。主として社会的なアプローチによりながら、これらの諸テーマについて検討を加えていくことになる。この授業では、我々の日常性のあり方に対する批判的かつ分析的な思考力を養うことを到達目標とする。	
	心理学Ⅰ	この授業では心理学がどのような内容をもつ学問分野なのかについて知り、そのおもしろさの一端に触れてもらえることを第一の目的としています。そのために心理学の理論を紹介するだけでなく、日常とのつながりを大切にして話を進めていきたいと考えています。具体的な到達目標として、①心理学が日常の生活と深く関わっていることを知ること、②心理学ではひとの心理・行動をどのように捉えようとしているかについて知ること、③心理学の基礎理論や心理学で用いられる概念を理解すること、④授業で学習した内容を日常生活に適用できること、⑤受講が自発的で継続的な心理学の学習を進める契機になることを掲げておきます。	
	心理学Ⅱ	この授業では心理学がどのような内容をもつ学問分野なのかについて知り、そのおもしろさの一端に触れてもらえることを第一の目的としています。そのために心理学の理論を紹介するだけでなく、日常とのつながりを大切にして話を進めていきたいと考えています。この授業では、社会心理学や認知心理学と呼ばれる領域の内容について授業を進めていきます。社会心理学とは社会の中でのひとつの行動を解明しようとするものであり、認知心理学は人間の情報処理のメカニズムを研究対象としています。授業では、これらを題材にしなが、人間の情報処理の優れた能力について言及していきます。	
	学校と子どもⅠ	子どもたちの生きる社会環境が激変する今日、教育の在り方がいつも以上に増して問われている。本授業では、日本型教育における「子ども観」及び「学校観」について省察しながら、子どもが人として成長していく上で、学校というどのような意義や役割を担っているかを明らかにし、これからの日本の「学校と子ども」の新しい関係について考察する。本授業の到達目標は、①自分のこれまでの経験と関連づけながら、子どもの成長と学校との関係や学校の役割及び仕組みなどを客観的に考察することができる、②現代の子どもたちを取り巻く課題を明らかにしながら、子どものよりよい成長を促すための「学校と子ども」の新しい関係について提案することができる、とする。	
	学校と子どもⅡ	互いに影響を与え合っている日本とアメリカの両国は、共に民主主義を掲げ、高齢化・情報化などの類似した状況に直面している。本授業では、日本とアメリカの「個と集団への意識」、「子ども観」、「学校観」等を比較し、両者の人間形成過程における違いを明らかにしながら、これからの日本における「学校と子ども」のよりよい関係の在り方について考察する。本授業の到達目標は、①子どもの人間形成において重要となる学校教育における日本とアメリカの違いについて理解することができる、②日本とアメリカの学校教育の比較を通して、これからの日本の学校教育の在り方について考えることができる、とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
外国語教育科目	英語Ⅰ	この科目は、4分割された英語授業の中でのStep1にあたります。英語は基本を大事にする教科です。これは今後、①専門教育の基礎、②将来の就職に備えにも通ずるものでもあります。Step1の授業を通じて、文法の知識が十分でないところを補充します。なぜこうなっているのか、理解できるよう導きます。文法と言うと難しく聞こえるが、英語学習では大切な約束事です。ここでは、これがが長、短の文章の中でどう使われているか勉強していきます。基礎からさかのぼり、詳しくしていきますので、簡単な英文はだいたい読み解けるようになると思います。	
	英語Ⅱ	この科目は、4分割された英語授業の中のStep2にあたります。Step2では、よく耳にする英語の音楽を通じて、英語の音により身近なものを感じてもらい、英語への興味を深めてもらおうという狙いです。リスニングが不得手で英語嫌いになっている人にも、音に慣れてもらいます。音の特徴から、音を聞きとる時の注意などを学習していきます。授業は、歌の聞き取りを目標とした訓練が中心となります。注意すべき音を正しく聞き取る練習をして、最近の若者音楽の理解へつなげます。また、リーディングを正確にするための確かな文法力、及び、リーディングと文法項目を交互にトレーニングして、読む力も養成します。	
	英語Ⅲ	この科目は、4分割された英語授業の中のStep3にあたります。Step3では単語、短文から始まって長文へと進んでいく読みの学習を行います。授業では、多くの訓練を通じて読むことの基礎を築きます。高度の文法を駆使して、長文を難なく読み超す能力を磨きます。また、英語の世界を読みこなす楽しさを味わってもらいます。授業は、基礎力(文法力、単語力)を伸ばし、長文の解読をしていきます。文章を一字一句翻訳しようと思わず、話の流れを追っていきます。また、リスニングについては対話文が理解できるように学習します。人の話の内容を聞き取る訓練が中心で、どう聞くことが戦略的にいいのか、学習を進めます。	
	英語Ⅳ	この科目は、4分割された英語授業の中のStep4にあたります。Step4は英語学習の最終Stepにあたり、英語で発信できるようにすることが目標です。いろいろな状況に対応できるように多くの必要な訓練をします。授業は、最終目標を発信と設定します。今までの受け身の内容とは異なり、自ら発信することを目標に掲げます。まず、今まで文章を理解することのみに学習が集中していたものを、これをコピーして自ら使ってみます。そして、書くことに近づけます。さらに、今まで音を聞きとるのみに集中していたものを、自ら使い、発信するために、暗記、応用して、自分の言葉として使ってみます。	
	日本語Ⅰ(外国人留学生対象)	日本の大学で日本人と共に日本語で学ぶために必要な日本語力を向上させていくことを学習目標とする。日本語の四技能(読解力・聴解力・文章表現力・口頭表現力)のうち、正確に聞き取り、必要な会話・講義などのまとまった話を聞き、話の流れ、構造を理解することを目標にする。この授業では、主に日本語を聞き取る能力の向上を目指す。必要な情報を正確に聞き取り、メモを取り、まとまった話を聞いて内容を報告する力を養う。また文章を読み、要旨をまとめる力の育成も目指す。さらにこの授業では留学生が学生生活を送る上で、周囲の人々との円滑なコミュニケーションが図れるようになることを目指す。	
	日本語Ⅱ(外国人留学生対象)	日本の大学で日本人と共に日本語で学ぶために必要な日本語力を向上させていくことを学習目標とする。日本語の四技能(読解力・聴解力・文章表現力・口頭表現力)のうち、正確に聞き取り、必要な会話・講義などのまとまった話を聞き、話の流れ、構造を理解することを目標にする。この授業では、日本語の4技能(聞く・話す・読む・書く)の総合的な向上を目指すものである。日本語Ⅱでは、主に日本語を読み取る能力の向上を目指す。必要な情報を正確に読み取り、文章のあらすじ、大意の読み取り、文章構造を理解する力を養う。また論理的な文章を作成する力の育成も目指す。	
	日本語Ⅲ(外国人留学生対象)	日本の大学で日本人と共に日本語で学ぶために必要な日本語力を向上させていくことを学習目標とする。日本語の四技能(読解力・聴解力・文章表現力・口頭表現力)のうち、正しい日本語と学術性を備えた大学生の文章としてふさわしい適切な表現ができるようになることを目標にする。この授業では、テキスト及びそれに関連する資料などの問題提起に対して、事実と意見を区別して書き、事実を踏まえて自分なりの見解をまとめ、それを高度な日本語で表現できるようにするための「表現技術」の育成を目指す。	
日本語Ⅳ(外国人留学生対象)	日本の大学で日本人と共に日本語で学ぶために必要な日本語力を向上させていくことを学習目標とする。日本語の四技能(読解力・聴解力・文章表現力・口頭表現力)のうち、とくに発表する際に必要となる口頭表現力を養成する。最終的に自分の関心のあるテーマについて発表するために、資料収集、調査分析、レジュメの作成、発表、討論などができるようにする。テキスト及びそれに関連する資料などの問題提起に対して、調査・発表を行い、自分なりの見解をまとめ、それを口頭発表して、「発表の技術」を養う。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門共通教育科目目群	スポーツ基礎演習	この授業では、本学に入学し卒業するまでの有意義な大学生活について考える。授業は8クラスに分かれて行うが、前・後期ともに、4回(1回目・全クラス合同：講話(聞く)、2・3・4回目・各クラス：討議(話す)、作文(書く)、発表(伝える))を1セットとして進める。講話の講演者は、本学ないし本学部の教員、本学卒業生、公務員、企業人等を予定している。なお、この授業は高校までの「ホームルーム」に相当するもので、担当教員はクラス担任の役割も果たす。前期は、a) 本学の歴史・理念・教育目標、競技スポーツ実績、b) 大学生生活の過ごし方(学修の仕方、スポーツクラブ活動の取り組み方、読書のススメ、アルバイトなど)、c) 卒業後の将来設計(進路・キャリア)、d) その他(国内外のニュース・動向など)、などをテーマとして取り扱い、後期は、a) スポーツ科学の全体像(学問体系、学会・研究会組織など)、b) 各学問領域の特徴(研究対象、研究の歴史、研究方法、研究のトピックス、スポーツ実践への貢献など)などをテーマとして取り扱う。到達目標は、①本学スポーツ科学部生としての誇りを身に付ける、②卒業後を見据えた大学生生活の過ごし方を考え、それを実践できるようにする、③スポーツ科学の学問領域の広さと深さを理解し、スポーツ科学に親しみ、④3・4年次で履修するスポーツ専門演習で選択する研究領域について考える、⑤聞く・話す(討議する)・書く・伝える(発表する)などのスキルを身に付けることとする。	
	スポーツキャリア形成	この授業では、スポーツ科学の専門教育を受けた者が、将来、社会的・職業的自立を図るためには、在学中に何を学習し、何を準備すれば良いかについて考える。授業は7クラスに分かれて実施するが、前・後期ともに、4回(1回目・全クラス合同：講話(聞く)、2・3・4回目・各クラス：討議(話す)、作文(書く)、発表(伝える))を1セットとして進める。講話の講演者は、本学ないし本学部の教員、本学卒業生などを予定している。なお、この授業は高校までの「ホームルーム」に相当するので、担当教員はクラス担任の役割も果たす。前期は、a) キャリア、キャリアデザインとは、b) スポーツ・健康関連の職域、c) 教員、公務員、インストラクター、トレーナー、企業人などの特徴、d) 体育・スポーツ系学部卒業生の就職動向、e) スポーツNPOの指し示しかた、f) スポーツとボランティア活動(学校・地域スポーツでの指導、各種スポーツ協会の運営)、g) スポーツと国際貢献、などをテーマとして取り扱い、後期は、a) 就職活動の概要、b) 自己の資質、適性の分析、c) 自己表現のしかた(マナー、エントリーシート)の書き方、面談のしかた(資質や長所・短所の伝え方)、ロールプレイ、コミュニケーションスキル)、などをテーマとして取り扱う。到達目標は、①スポーツ関連の職域について理解する、②就職活動について理解し、在学中に取り組むべき課題を明確にすることができる、③大学生生活(学修のしかた、課外でのスポーツクラブ活動等の取り組みなど)に思いっきり向きあうことができる、④自己分析方法、自己表現方法などについて理解し、自己の特徴を活かした活動や表現をできるようにする、⑤聞く・話す(討議する)・書く・伝える(発表する)などのスキルを身に付けることとする。	
	スポーツ哲学(体育原理を含む)	スポーツのパフォーマンスを高めるためには、選手自らが、主体的なスポーツライフを送ることが重要となる。そのため本授業では、自らのこれまでのスポーツライフを反省的に捉えるための「視点」を提供するとともに、社会の中のスポーツが抱える現代的課題を知ることによって、今後の充実したスポーツライフを展望する「視点」についても学習する。到達目標は、①スポーツパフォーマンスとスポーツライフの関係について理解する、②自らのスポーツライフを振り返る「リフレクション」の方法について理解する、③「体育」と「スポーツ」の概念的相違について理解する、④社会の中のスポーツが抱える現代的課題について理解する、⑤自らの今後のスポーツライフを展望するための「理論知」の活用について理解することとする。	
	スポーツ史	近代スポーツは近代英国で誕生したが、それ以前にも、古代ギリシャやローマなど、スポーツ的な営みはあらゆる文明において見出される。また、現代では、ニュースポーツが次々と生み出され、対戦型のビデオゲームなどがエレクトロニック・スポーツと呼ばれるなど、スポーツの概念は日々変化している。本講義では、古代から近代を通して現代にいたるまでのスポーツの概念の変遷と歴史について学習する。到達目標は、①スポーツの意味と語源を理解する、②古代、中世期、近代、現代において、それぞれの時代のスポーツの概念を理解する、③近代スポーツの誕生と成立の背景、発展の過程を理解する、④日本におけるスポーツの意味と捉え方の変遷を理解する、⑤現代及びこれからのスポーツを、歴史的な視点から捉えることができるようになることとする。	
	スポーツ社会学	今日、スポーツはかつてなく普及し、発展している。しかし、スポーツの高度化と大衆化の発展は、社会に対してプラスの機能だけでなく、マイナスの機能も生じさせている。また、スポーツが社会現象として存在する限り、スポーツもまた社会のあり方によって規定される。本授業では、社会の変化のなかでスポーツの考え方やあり方を学習し、これからの進むべき方向について考える視点を学ぶ。到達目標は、①スポーツの社会学的視点を理解する、②スポーツと社会の関係を理解するとともに、社会との関係でスポーツを捉えることができるようになる、③スポーツの問題を社会との関係から説明できるようにする、④スポーツの社会化と制度化について理解する、⑤日本のスポーツについて社会学的視点からその特徴と課題を説明できるようにすることとする。	
	スポーツ経営学	スポーツ経営はスポーツを手段にした企業活動と考えられる傾向があるが、公共・民間、営利・非営利を問わずあらゆる組織体の活動に共通にみられる営みである。したがって、スポーツ経営は、スポーツのもっている様々な個人的・社会的な価値を最大限に引き出すことを企図して行われる組織体の営みとして捉えられる。この授業では、2人の教員の授業をとおして、様々なスポーツ組織の運営と事業について学ぶ。到達目標は、①スポーツ経営の概念を理解する、②総合型地域スポーツクラブの必要性和社会的意義を説明できるようにする、③地域スポーツクラブ、スポーツ競技団体、商業スポーツ団体、プロ・スポーツクラブの経営・マネジメントについて理解し、その現状と課題を説明できるようにする、④スポーツ事業のマーケティングとプロモーションの方法を理解することとする。 (オムニバス方式/全15回) (15 笠野英弘/7回) 1~7回: スポーツそれ自体の経営 (3 入江省熙/8回) 8~15回: 経営のなかのスポーツ	オムニバス方式
	スポーツ心理学	スポーツ心理学はスポーツに関する人間の心理的現象を扱う心理学の一領域と位置づけられる。スポーツに関する心理学的基礎、スキルの獲得に関わる運動学習、スポーツに関わる様々な問題等、心理的現象を広範囲に学習し、競技力の向上やスポーツ指導につながる素地を形成する。到達目標は、①・スポーツ心理学の代表的な理論や基本的知識について理解を深め、説明することができる、②得た知識を自分自身の競技生活やスポーツの指導場面に当てはめて考えることができる、③スポーツ場面で生じる「こころ」と「からだ」の現象を関連させて理解することができることとする。	
	スポーツ教育論	スポーツ教育の目的、内容、方法に関わった論点を分析・考察する。また、スポーツのもつ教育的可能性を探りつつ、スポーツ教育に関わる具体的な論点を取り上げながら、実践的な視点からスポーツのあり方などについて考える。さらに、スポーツと教育の関係論、並びに体育授業の観察法や授業のあり方について理解する。到達目標は、①スポーツのもつ教育的可能性、スポーツの目標、内容、方法についての基本的な知識を理解する、②現代スポーツの問題状況について説明できる、③現代スポーツが抱える諸問題について、様々な観点から議論できる、④現代スポーツが抱える諸問題の解決策について自分の意見を述べることができる、⑤体育授業のあり方について議論できることとする。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門共通教育科目	B群	野外活動・教育論	野外活動とは、自然環境を背景として行われる身体的、知的、情緒的、文化芸術的諸活動の総称である。野外教育とは、野外活動を教材として、自己や他者、自然環境の理解を深めることを目的に行われるものである。本授業では、0歳から100歳までの健康、教育、生きがいづくりに深く関わる野外活動、野外教育の基礎理論を、実践例とともに学習する。到達目標は、①野外活動と野外教育の基礎的な理論、意義について理解する、②近年の野外活動の動向について理解する、③対象に応じた野外教育プログラム、および指導法について理解する、④健康づくり、生きがいづくりに貢献する野外活動のあり方について理解することとする。	
		コーチング論(運動学、運動方法学を含む)	本授業は運動やスポーツの指導者を目指す者にとって必要不可欠な事柄について、運動学的、運動方法学的視点から学習する。具体的には、運動技術を構造的・質的に捉え、その観察方法や評価方法を理解し、また、運動指導(コーチング)上の留意点やノウハウを学習することによって、優れた運動指導者(体育教師やコーチ)としての基礎的・基本的知識、スキルを習得する。さらには、「運動指導(コーチング)とは何か」、「運動指導者(体育教師やコーチ)とは何か」という運動指導(コーチング)の本質についての理解を深めていく。到達目標は、①運動の概念を理解する、②運動技術の構造や特性、観察・評価の方法を理解する、③運動指導(コーチング)上の留意点を理解し、ノウハウを身につける、④科学と情報を運動指導(コーチング)現場で有効活用できる能力を高める、⑤その他、運動指導(コーチング)に必要な不可欠な基礎的・基本的知識を深めることとする。	
	C群	スポーツ生理学	スポーツや運動などヒトのすべての身体活動は、筋活動の結果として捉えることができる。筋活動は、神経(脳)の指令によるものであり、脳とスポーツには密接な関わりがある。また、筋活動を継続するには、肺や心臓といった呼吸循環系の働きによって筋活動に必要なエネルギーを供給し続ける必要がある。本授業では、これらのスポーツに関連する生理学的知識を学ぶ。到達目標は、①生理学的な側面からスポーツを捉え、理解する、②科学的なトレーニングを実践するための前提となる生理学的知識を修得する、③特殊環境下における運動時の生理応答及びその適応を理解する、④スポーツ活動中の熱中症を予防できるようになることとする。	
		スポーツ栄養学	ヒトは身体機能の維持や成長に必要な物質を体外から取り込んでいる。スポーツ選手がトレーニングの効果を最大限に引き出すためには、適切な栄養素の摂取が求められる。本講義では、五大栄養素の役割、消化吸収・代謝の過程など基礎的な内容を紹介する。また、生体のリズムと栄養の関係、エネルギー代謝および基礎代謝測定法について理解を深め、ライフステージごとの栄養について知識を深める。到達目標は、①栄養学的側面からスポーツ・身体活動を捉え、理解する、②科学的根拠に基づいた食事を実践するための前提となる知識を修得する、③栄養素の消化・吸収からエネルギー・栄養代謝について全体像を捉え、理解する、④各ライフステージにおける心身機能と栄養について知識を習得する、⑤運動のための食事コントロールおよびサプリメントの問題点を理解することとする。	
		スポーツバイオメカニクス(機能解剖学を含む)	身体運動は地球という重力環境下、すなわち様々な力学的法則の下で行われている。これらの法則を理解することは、スポーツの技術やトレーニング際の特性などを理解し、目的に対応したコーチングやトレーニングを実施する際に役立つ。本授業では、このようなバイオメカニクスの有用性、さらにはその限界について紹介することで、スポーツ実践に役立てるための知識や視点を得ることを目指す。到達目標は、①運動・スポーツをバイオメカニクスの側面から捉え、理解するための基礎知識(力的諸法則など)を理解する、②各種運動のバイオメカニクスから見た特徴を理解する、③バイオメカニクスから見た技術の評価法について理解する、④バイオメカニクスから見たトレーニング運動の評価法について理解することとする。	
		体力論	体力の定義は、運動やスポーツに関連するものだけではなく、健康に関連するものや精神的要素を含むものなど、様々な定義・分類が提唱されている。本授業では、多様な体力の概念について概説し、目的に応じた体力の測定・評価法や体力トレーニングの原理・原則について学ぶ。また、発育発達の側面から各種体力の変化を捉え、生理的年齢からみた適切なトレーニングの導入について考えていく。到達目標は、①さまざまな体力の定義について理解する、②年代ごとの体力の発達の特性を理解する、③体力の測定・評価法を理解する、④各個人の特性に応じた体力の高め方を理解することとする。	
		スポーツ医学	健康の維持増進や運動能力の向上のため、全ての年代を対象に運動やスポーツ活動によって生じる身体的・精神的な変化を理解する。そのための基礎となる解剖学、生理学の知識を整理しながら、関係する内科的・外科的疾患について理解する。さらに、運動習慣が発症に大きく影響する生活習慣病についても知識を深める。到達目標は、①生活上の健康について理解を深め、自らの健康を保持増進できる能力を育てる、②教員やスポーツ指導者として、スポーツによる健康障害について理解し、それを予防しつつ競技力の向上を目指すことのできる能力を育てる、③重要な生活習慣として運動習慣をとらえ生活習慣病予防を念頭に対象者に指導することのできる能力を育てる、④運動負荷試験を正しく事故なく実施し、その結果を正確に評価する能力を育てることとする。	
		スポーツ傷害論	指導者などこれからスポーツ関わっていくのであれば、人体の解剖学的・生理学的な理解を深めて、スポーツ活動中に起こる傷害についての基本を理解しておくことは大切である。この授業は基礎的なスポーツ傷害を各部位ごとに分け、評価・応急処置だけでなくその予防までできるように、そして、コンディショニングの手法・テーピングを含めてアスレティック・リハビリテーションとその計画を立て、実践指導出来るように学ぶ。到達目標は、①スポーツ傷害に対する応急処置・評価ができる、②テーピングを効果的に実践できる、③ストレッチを効果的に実践できる、④アスレティック・リハビリテーション計画を作成できることとする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門共通教育科目 C群	情報処理(統計を含む)	現代社会では、科学技術の発達により様々な情報がいつでも・どこでも・誰でも容易に入手可能となっている。しかし、その中には虚偽や曖昧な情報も多く存在するために、必要な情報を適切に選択するとともに、発信する能力が要求される。本授業では、情報の入手や分析とともに、発信する際の基礎的な要素としてパソコンの操作方法、インターネットでの情報検索法、統計処理法などの学習をとおして、上述の情報処理能力を身に付ける。到達目標は、①パソコンの基本操作方法について理解する、②インターネットを用いた情報収集法と留意点について理解する、③Wordの基本的な使用方法について理解する、④Excelの基本的な使用方法について理解する、⑤統計処理の基本的知識について理解することとする。	
	実技実習 a 1 (トレーニング/体づくり運動)	本授業では、様々なスポーツに共通して要求される諸能力(筋力やスピード、パワー、持久力など)を高めるためのトレーニングに加え、ウォーミングアップやクーリングダウンなど、トレーニングや運動を行う上で前提となる手段や方法の内容について、発育発達段階を考慮しながら、実習形式で学習していく。これらの内容は、競技者の競技力向上に必要な情報である一方で、より確かな学力・豊かな心・健やかな体の調和という「生きる力」を育むための、生涯を通した健康づくりに対する運動への理解を深めるために必要な情報も含んでいる。到達目標は、①様々なスポーツに必要とされる基礎的能力を理解し、それを高めるためのトレーニングが実践できるようになる、②様々な運動の特性と効果について、実践の中で説明できるようになる、③運動の楽しさを実践の中で感じ、他者とのコミュニケーションがとれるようになる、④自らで課題を設定し、必要な運動プログラムを考案できるようになることとする。	
	実技実習 a 2 (ダンス)	ダンスは、「創作ダンス」、「フォークダンス」、「現代的なリズムのダンス」で構成され、イメージをこらえた表現や踊りを通じた交流を通して仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重視する運動で、仲間とともに感じを込めて踊ったり、イメージをとらえて自己を表現したりすることに楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。本授業では、中・高等学校学習指導要領で取り扱われるダンスの種目(創作ダンス、フォークダンス、現代的なリズムのダンス)について、基本的な技能を習得するとともに、それぞれ特有の表現や踊りを高めて交流や発表ができるようになる。また、その過程においてダンスの練習法についても学ぶ。到達目標は、①ダンスの基本的技能を習得する、②創作ダンス、フォークダンス、現代的なリズムのダンスに特有な表現や踊りを高めて交流や発表ができるようになる、③ダンスの系統的・段階的指導の方法を理解し、効果的な指導ができるようになる、④ダンスの練習法に関する理解を深めることとする。	
	実技実習 a 3 (器械運動)	器械運動は、マット運動、鉄棒運動、跳び箱運動、平均台運動で構成され、器械の特性に応じて多くの「技」がある。これらの技に挑戦し、その技ができる楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。本授業では、中・高等学校学習指導要領で取り扱われる器械運動の種目(マット運動、鉄棒運動、跳び箱運動、平均台運動)について、基本的技能を習得するとともに、各種目の技術指導のポイントについて理解を深める。また、その過程において器械運動の練習法についても学ぶ。到達目標は、①器械運動の各種目の基本的技能を習得する、②器械運動の各種目の技術指導ポイントを理解する、③安全管理(事故防止、危険回避)も含めた指導法及び系統的・段階的指導の方法を理解し、効果的な指導ができるようになる、④器械運動の練習法に関する理解を深めることとする。	
	実技実習 a 4 (陸上競技:短距離・跳躍・投てき)	人間の基本運動である走る・跳ぶ・投げるという動作は陸上競技だけでなく様々なスポーツにおいても基本となる運動である。授業では、学習指導要領で取り扱われている陸上競技の種目について、各種目の技術指導のポイントやバイオメカニクスの特性について理解を深める。また、実習を通して基礎技術を習得し、ルールや審判法についても学ぶ。到達目標は、①各種目の技術指導のポイントやバイオメカニクスの特性について理解を深める、②安全管理(事故防止、危険回避)も含めた指導法及び発達・学習段階に応じた指導法を理解し、効果的な指導ができるようになる、③各種目の基礎技術を習得する、④陸上競技のルール、審判法について理解を深めることとする。 (オムニバス方式/全15回) (14 太田 涼/5回) 1~5回:短距離・リレーについて (2 麻場一徳/5回) 6~10回:ハードル・砲丸投について (19 村山 靖/5回) 11~15回:走幅跳・走高跳について	オムニバス方式
	実技実習 a 5 (陸上競技:長距離)	陸上競技の長距離走は、「走る」という単一動作の長時間にわたる循環運動であり、自己の記録に挑戦したり、相手と競走したりする楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。本授業では、長距離走の基本技術の習得、また、中・高等学校学習指導要領で課題とされている「必要なペースを守り一定の距離を走る能力」や「ペースの変化に対応して走る能力」を高めるための様々な練習を実施するとともに、練習・トレーニング法や指導法についての理解を深める。また、ルールや審判法についても学ぶ。到達目標は、①長距離走の様々な練習を実施し、基礎的技術を習得する、②長距離走の基礎的・発展的練習・トレーニング法についての理解を深める、③安全管理(事故防止、危険回避)も含めた指導法及び発達・学習段階に応じた指導法を理解し、効果的な指導ができるようになる、④陸上競技(長距離走)のルール、審判法について理解を深めることとする。 (オムニバス方式/全15回) (4 上田誠仁/8回) 1~8回:長距離走の基礎的練習について (28 飯島理彰/7回) 9~15回:長距離走の発展的練習について	オムニバス方式
	実技実習 a 6 (水泳・水中運動)	水泳は、クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライなどから構成され、浮く、進む、呼吸をするなどのそれぞれの技能の組合せによって成立している運動で、それぞれの泳法を身に付け、続けて長く泳いだり、速く泳いだり、競い合ったりする楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。本授業では、中・高等学校学習指導要領で取り扱われる水泳の種目(クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライ)について、基本的技能を習得するとともに、水中エクササイズの実践方法についても習得し、それらの技術指導のポイントについて理解を深める。また、その過程において練習法についても学ぶ。到達目標は、①水泳の各種目の基本的技能を習得する、②水中エクササイズの実践方法を習得する、③水泳の各種目・水中エクササイズの技術指導ポイントを理解する、④安全管理(事故防止、危険回避)も含めた指導法及び段階的指導の方法を理解し、効果的な指導ができるようになる、⑤水泳・水中エクササイズの練習法に関する理解を深めることとする。	
実技実習 a 7 (スケート)	スケートは、中・高等学校学習指導要領において、地域や学校の状況に応じて積極的に導入すべき野外活動の一つとして位置づけられている。本授業では、スケートリンクで、用具を用いて氷上を滑走することを通して冬季の氷上活動に親しむといった特性を踏まえ、一定の距離でタイムを競うスピードスケート及び様々な滑走技術を競うフィギュアスケートなどを、基本姿勢、スケエティング、ステップ、停止などの基本的技能を習得し、最終的にタイムや技能を競うことができるようにする。また、その過程において技術指導のポイントや練習法についても学ぶ。到達目標は、①スケートの基本的技能を習得する、②スケートの技術指導ポイントを理解する、③安全管理(事故防止、危険回避)も含めた指導法及び段階的指導の方法を理解し、効果的な指導ができるようになる、④スケートの練習法に関する理解を深めることとする。	集中	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門共通教育科目	実技実習 b 1 (バスケットボール)	バスケットボールは、ドリブルやパスなどのボール操作で相手コートに侵入し、シュートやトライなどをして、一定時間内に相手チームより多くの得点を競い合う「ゴール型ゲーム」の一つである。本授業では、中・高等学校学習指導要領で示されている「状況に応じたボール操作と空間に走り込むなどの動き、空間を埋めるなどの連携した動きによって空間への侵入などから攻防(ゲーム)を展開すること」を目指し、基本的な個人技能を習得するとともに、チームプレイや戦術、ルールに関する知識と理解を深め、最終的に個人やチームの能力に応じた作戦を立て、楽しく安全にゲームができるよう進める。同時に、バスケットボールの技術構造を理解し、練習法や指導法、さらには審判法を身につける。到達目標は、①バスケットボールの基本的個人技能を習得する、②バスケットボールのチームプレイや戦術を理解する、③バスケットボールのルールに関する知識を養う、④安全に楽しくゲームをおこなうことができる、⑤バスケットボールの技術構造を理解し、練習法や指導法、審判法を身につけることとする。	
	実技実習 b 2 (サッカー)	サッカーは、ドリブルやパスなどのボール操作で相手コートに侵入し、シュートやトライなどをして、一定時間内に相手チームより多くの得点を競い合う「ゴール型ゲーム」の一つである。本授業では、中・高等学校学習指導要領で示されている「状況に応じたボール操作と空間に走り込むなどの動き、空間を埋めるなどの連携した動きによって空間への侵入などから攻防(ゲーム)を展開すること」を目指し、基本的な個人技能を習得するとともに、フォーメーションや戦術、ルールに関する知識と理解を深め、最終的に個人やチームの能力に応じた作戦を立て、楽しく安全にゲームができるよう授業を進める。同時に、サッカーの技術構造を理解し、練習法や指導法、さらには審判法を身につける。到達目標は、①サッカーの基本的個人技能を習得する、②サッカーのフォーメーションや戦術を理解する、③サッカーのルールに関する知識を養う、④安全に楽しくゲームを行うことができる、⑤サッカーの技術構造を理解し、練習法や指導法、審判法を身につけることとする。	
	実技実習 b 3 (ラグビー)	ラグビーの基本プレイ(ハンドリング、ランニング、キッキング、コンタクト)やセットプレイを段階的に習得し、最終的に安全に楽しくゲームができるように授業を進めていく。その過程で個人スキルや集団スキルを身につけ、段階ごとにゲームを行うことで、それらの習得状況を確認しながら進める。同時に、ルール、戦術に関する知識と理解を深めながら、練習法や指導法、さらには審判法を身につける。なお、安全の確保が難しい場合はコンタクトプレイの無い、タッチラグビーに変更する。到達目標は、①ラグビーの基本プレイおよびセットプレイを習得する、②ラグビーのルールに関する知識を養う、③ラグビーの戦術に関する知識と理解を深める、④安全に楽しくゲームをおこなうことができる、⑤練習法や指導法、審判法を身につけることとする。	
	実技実習 b 4 (ホッケー)	ホッケーは、ドリブルやパスなどのボール操作で相手コートに侵入し、シュートやトライなどをして、一定時間内に相手チームより多くの得点を競い合う「ゴール型ゲーム」の一つである。本授業では、サッカーと同様に「状況に応じたボール操作と空間に走り込むなどの動き、空間を埋めるなどの連携した動きによって空間への侵入などから攻防(ゲーム)を展開すること」を目指し、基本的な個人技能を習得するとともに、フォーメーションや戦術、ルールに関する知識と理解を深め、最終的に個人やチームの能力に応じた作戦を立て、楽しく安全にゲームができるよう授業を進める。同時に、ホッケーの技術構造を理解し、練習法や指導法、さらには審判法を身につける。到達目標は、①ホッケーの基本的個人技能を習得する、②ホッケーのフォーメーションや戦術を理解する、③ホッケーのルールに関する知識を養う、④安全に楽しくゲームを行うことができる、⑤ホッケーの技術構造を理解し、練習法や指導法、審判法を身につけることとする。 (オムニバス方式/全15回) (12 SHEARN, John Patrick/8回) 1~8回:ホッケーの基礎的練習法・指導法 (12 寺本祐治/7回) 9~15回:ホッケーの基礎的練習法・指導法、及び審判法	オムニバス方式
	実技実習 b 5 (バレーボール)	バレーボールはレシーブ・トス(パス)・アタックを繰り返すスポーツである。特に初級者にとってはレシーブやトス(パス)の技術を習得することが重要である。そのため授業では必ずレシーブとパス練習を行う。また授業ごとに1つのスキルに焦点をあてた分習法を実施し、個人の技術力向上を図る。最終的には全習法であるゲームの中で仲間と連携して攻防を展開できるように目指す。到達目標は、①バレーボールの特性、ルールやマナーを理解し、必要な技術を習得する、②基礎体力の保持増進のため、バレーボールを通して身体を動かす習慣をつける、③ゲームや仲間との協調性を通じて、バレーボールの楽しさを知る、④各自の体力水準を把握し、自己の健康管理に生かすこととする。	
	実技実習 b 6 (テニス)	テニスの基本的技能(フォアハンドストローク、バックハンドストローク、ボレー、サービス等)やシングルスおよびダブルスにおけるラリーの技能を段階的に習得し、最終的に楽しく安全にゲームができるよう授業を進めていく。その過程において、段階ごとにゲームを行うことで、それらの習得状況を確認しながら進める。同時に、ルール、戦術に関する知識と理解を深めながら、練習法や指導法、さらには審判法を身につける。到達目標は、①テニスの基本的技能を習得する、②テニスのシングルスおよびダブルスにおけるラリーの技能を習得する、③テニスルールや戦術に関する知識と理解を深める、④楽しく安全にゲームをおこなうことができる、⑤練習法や指導法、審判法を身につけることとする。	
	実技実習 b 7 (ソフトボール)	ソフトボールは、身体やバットの操作と走塁での攻撃、ボール操作と定位位置での守備などによって攻守を規則的に交代し、一定の回数内で相手チームより多くの得点を競い合う「ベースボール型ゲーム」の一つである。本授業では、中・高等学校指導要領で示されている「状況に応じたバット操作と走塁での攻撃、安定したボール操作と状況に応じた守備などによって攻防を展開すること」を目指し、基本技能を習得するとともに、チームプレイやフォーメーション、ルールや戦術に関する知識と理解を深め、最終的に個人やチームの能力に応じた作戦を立て、楽しく安全にゲームができるよう授業を進めていく。同時に、ソフトボールの技術構造を理解し、練習法や指導法、さらには審判法を身につける。到達目標は、①ソフトボールの基本的技能を習得する、②ソフトボールのチームプレイやフォーメーションを理解する、③ソフトボールのルールや戦術に関する知識と理解を深める、④安全に楽しくゲームをおこなうことができる、⑤練習法や指導法、審判法を身につけることとする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 共 通 教 育 科 目	c 科 目 群	実技実習 c 1 (柔道)	本授業では、柔道の本質に触れ、技術の習得とともに礼法を中心に「格闘技と礼との関わり」を考え、また、中・高等学校指導要領で取り扱われる内容に則りながら、礼法、姿勢、組み方、歩き方、崩し、作り、掛けの理合いを理解し、生涯スポーツとしての柔道の習得、さらには柔道指導法としての基本的なコーチング技術の習得を目的とする。到達目標は、①柔道の本質や歴史について理解する、②柔道の合理的実践を通して礼法に関する理解を深める、③柔道の基本動作および対人的技能を習得する、④生涯スポーツとしての柔道の習得、さらには柔道指導法としての基本的なコーチング技術を習得することとする。	
		実技実習 c 2 (レスリング)	レスリングは、古代ギリシャ時代以来、連続と続く3000年の歴史が証明する教育的に十分な効果が期待できる素晴らしいスポーツである。本授業では、レスリングの初歩的、基本的技能の習得とともに、独自のルールを工夫し、初心者でも安全に楽しく試合ができるようになるまでの過程を学修する。また、レスリングを通して、相手との激しい格闘的な対応の中から旺盛な気力を培うとともに、相手を尊重する態度や礼儀、規則の遵守、公正な態度等を養うことで、社会的に望ましい行動の仕方や自分の感情をコントロールする力を身につける。到達目標は、①レスリングの特性や歴史について理解する、②レスリングの実践を通して礼儀や自己コントロールする力を養う、③レスリングの初歩的、基本的技能を習得する、④レスリングのルールを工夫し、安全に楽しく試合ができるようになる、⑤レスリングの練習法や審判法に関する知識を養うこととする。	
		実技実習 c 3 (空手道)	本授業では、「空手に先手なし」と言われるように、攻撃より防御に重きをおく一武道としての特性とともに空手道の誕生と歴史について学習する。実技面では、空手の基本的な技とその統合・発展した形を習得する。また、鍛錬と実践の過程において礼節を重んじ、お互いの人格を尊重し合うことの大切さを知り、空手道が自己の人間形成の一助となることを認識する。さらには、技術指導のポイントや練習法についても学ぶ。到達目標は、①空手道の特性や歴史について理解する、②空手道の実践を通して礼儀やお互いの人格を尊重し合うことの大切さを認識する、③空手の基本的な技とその統合・発展した形を習得する、④空手の技術指導ポイントや練習法、審判法について学ぶ。	
	d 科 目 群	実技実習 d 1 (野外活動:キャンプ)	本授業では、登山をメインプログラムとした教育キャンプを行う。実習は、山梨県内の山岳地域(南アルプス、八ヶ岳周辺)において、4泊5日の日程で行う。歴史、文化、景観に優れる山岳環境での実習を通して、野外活動の教育的意義や価値、人と自然のかかわり、地域文化の理解を深めることを目的とする。到達目標は、①教育的側面から野外活動を捉え、その意義や価値について理解を深める、②野外教育の理論に基づく教育キャンプの実践方法について理解を深める、③人と自然、地域文化の関わりについて理解を深める、④共同生活を通して、多様な人間関係、社会的態度のあり方について理解を深めることとする。	集中
		実技実習 d 2 (野外活動:水辺)	本授業では、水辺活動の代表であるカヌー、カヤックを行う。実習は、富士五湖周辺において、4泊5日の日程で行う。歴史、文化、景観に優れる水辺環境での実習を通して、野外活動の教育的意義や価値について理解を深めることを目的とする。到達目標は、①教育的側面から野外活動を捉え、その意義や価値について理解を深める、②カヌー、カヤックに関する基本的な知識、技能を習得する、③野外教育の理論に基づく教育キャンプの実践方法について理解を深める、④共同生活を通して、多様な人間関係、社会的態度のあり方について理解を深めることとする。	集中
		実技実習 d 3 (野外活動:雪上)	本授業では、冬季の代表的な野外活動であるスキーを行う。実習は、山梨・長野の高原地域において、4泊5日の日程で行う。内容として、アルペンスキーに加え、ネイチャースキーによる自然散策などを行う。歴史、文化、景観に優れる雪上環境での実習を通して、野外活動の教育的意義や価値、人と自然のかかわり、地域文化の理解を深めることを目的とする。到達目標は、①教育的側面から野外活動を捉え、その意義や価値について理解を深める、②スキーに関する基本的な知識、技能を習得する、③人と自然、地域文化との関わりについて理解を深める、④共同生活を通して、多様な人間関係、社会的態度のあり方について理解を深めることとする。	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通	スポーツ専門演習1	この授業では、13研究領域(担当教員)のなかから、各自が興味・関心のある領域を選択し、その領域の研究法を学びながら「スポーツを科学する」ことの面白さ、難しさを楽しむ。前期は、選択した研究領域について、最初に、1) 研究対象、2) 研究の歴史(過去、現在、未来)、3) 文献等の検索のしかた、4) 研究の手順(a. 研究テーマの決定、b. 研究計画の立案、c. 研究の実施、d. 研究結果の整理と考察、e. 研究の結論の提示、f. 今後の研究課題の提示、g. 研究抄録の作成、h. 研究発表、など)などを学ぶ。次に、これまでの運動・スポーツにかかわる自己体験や文献研究等をもとにして、これから研究を進めたいテーマを3~5選定する。後期は、前期で選定したテーマのそれぞれについて研究計画を立案し、予備研究(実験・調査、結果の整理と考察、など)をとおして研究実施の可能性を探り、ひとつのテーマを選定する。そしてその一連の経過を発表する。研究はひとりでおこなうことも、教人でおこなうこともよいが、教人でおこなう場合には、それぞれの分担課題を明確にする。到達目標は、①研究の手順を理解する、②実験や予備研究を実施し、研究の面白さ、難しさを知る、③研究の取り組み方をスポーツトレーニングなどの様々な場面で活かすことができることとする。	
	スポーツ専門演習2	この授業では、原則としてスポーツ専門演習1で履修した領域を選択する。前期は、「スポーツ専門演習1」で決定したテーマについて本研究を実施し、研究結果を整理し考察する。後期は、前期で得られた研究結果と考察をもとにして、研究論文としてまとめ、ゼミ論文発表会で発表する。研究の実施はひとりでおこなっても、教人でおこなってもよいが、教人でおこなう場合でも研究論文は分担課題に沿ってひとりでもまとめ、ひとりでも発表することとする。到達目標は、①小さいテーマ、大きいテーマに関わらず、研究の手順(a. 研究テーマの決定、b. 研究計画の立案、c. 研究の実施、d. 研究結果の整理と考察、e. 研究の結論の提示、f. 今後の研究課題の提示、g. 研究抄録の作成、研究発表、など)に沿って研究をおこなっていくことの意義、大切さを理解する、②研究の背景には、研究成果の積み重ね、研究機器の開発などの歴史があることを理解する、③研究論文を作成していく際には、仲間との協力、コミュニケーションが大切であることを理解することとする。	
専門科目	競技スポーツマネジメント論	トップアスリートの競技力向上を前提として、①チームづくりのあり方、②アスリート育成のあり方、そして③指導者育成のあり方などを組織経営論づくり、人材育成論の立場から講義し、競技スポーツ集団を形成する上での人的、物的、金銭的資源のシステム化とそのための様々な課題についての理解を図る。到達目標は、①トップアスリートの競技力向上を目指す上で必要なマネジメントのあり方を理解する、②チームづくりを進める上で必要なマネジメントの知識を習得する、③トップアスリート育成の上で必要なマネジメントの知識を習得する、④競技スポーツの指導者を育成する上で必要なマネジメントの知識を習得することとする。 (オムニバス方式/全15回) (2 麻場一徳/7回) 1~5回、14、15回:陸上競技の取り組み等 (5 川上隆史/4回) 6~9回:スケート競技の取り組み (9 高田裕司/4回) 10~13回:レスリングの取り組み	オムニバス方式
	競技スポーツ情報戦略論	トップアスリートの競技力向上を前提として、情報戦略のあり方や進め方について理解するとともに、様々な競技種目の現場で行われている情報戦略の現状・課題・対策等を学習することによって、情報をパフォーマンス活かすための方法論を習得する。到達目標は、①トップアスリートの競技力向上に資する情報戦略のあり方を理解する、②情報戦略を進める上で必要な情報の収集・分析・活用のあるあり方と方法を理解する、③様々な競技種目の現場で行われている情報戦略の現状・課題・対策を理解することとする。 (オムニバス方式/全15回) (11 塚田雄二/5回) 1~5回:情報戦略のあり方、サッカーにおける現状と課題等 (6 神田忠彦/5回) 6~10回:水泳における現状と課題等 (25 山部伸敏/5回) 11~15回:柔道における現状と課題等、及びまとめ	オムニバス方式
	競技スポーツコーチング論	近年、人を導き、人を育てる営みであるコーチングはますます重要なものとなり、その実践にあたっては幅広い分野の知識や情報に基づいた高度なスキルを要求されるものとなっている。授業では、競技力向上を目指す競技スポーツコーチングの在り方や知識、スキルを習得するために、種目特性の異なる3人の教員が①コーチング哲学、②コーチング方法、③コーチに求められる資質、④トップアスリートの育成事例などについて講義する。到達目標は、①科学と情報をコーチング現場で有効活用できる能力を高める、②トップアスリートへのコーチングスキルを高める、③トップアスリート育成のために必要なマネジメント方法を理解する、④自己のコーチング哲学を確立させることとする。 (オムニバス方式) (14 太田 涼/5回) 1~5回:個人スポーツの立場から (12 寺本祐治/5回) 6~10回:球技スポーツ(ゴール型)の立場から (23 清水 正/5回) 11~15回:球技スポーツ(ベースボール型)の立場から	オムニバス方式
	競技スポーツトレーニング論	トップアスリートの競技力向上を目指したトレーニングのあり方について理解するとともに、トレーニングにおけるPDCAサイクルの活用をのしかた、現場での実践例や課題について理解を深め、最終的に自身のおかれた立場に応じたトレーニングを企画、立案、実践できる能力を身につける。到達目標は、①トップアスリートの競技力向上を目指す上で重要なPDCAサイクルを理解する、②競技スポーツにおけるトレーニングを進める上で重要なPDCAサイクルを理解する、③様々な競技種目の現場で行われているトレーニングの現状、課題、対策を学習する、④トレーニングを企画、立案、実践できる能力を身につけることとする。 (オムニバス方式/全15回) (12 寺本祐治/6回) 1~6回:トレーニングのあり方、ホッケーにおける現状と課題等 (26 吉田浩二/4回) 7~10回:ラグビーにおける現状と課題等 (4 上田誠仁/5回) 11~15回:陸上競技長距離種目における現状と課題等、まとめ	オムニバス方式
	スポーツコミュニケーション論	コミュニケーションは人間に必要な不可欠な行動である。本授業のねらいの一つは、日常生活のみならずスポーツにおいて行われているコミュニケーションを意識し少しでも問題視することである。まずコミュニケーションの基礎理論を学ぶ。コミュニケーションの単純なモデルを検討してから、さまざまなコミュニケーション形態を学ぶ。到達目標は、①特にスポーツにおけるコミュニケーションにおいては、チーム内のコミュニケーション、対戦相手とのコミュニケーション、審判と選手との間のコミュニケーション、選手と観客との間のコミュニケーション、マス・メディアを媒介としたスポーツなど、それぞれのケースを検討し、その実際を理解する、②コーチングに際して必要となるコミュニケーションスキルの実践に関しても演習することによって修得を目指すこととする。	
競技スポーツ	障がい者スポーツはリハビリテーションを目的とした活動だけでなく、競技スポーツや生涯スポーツへと拡がり、さらに交流を目的とした活動へと発展しつつある。障がい者に対する正しい知識と各障がい者のスポーツ活動の実態や歴史的背景について学ぶ。また、全国障害者スポーツ大会の目的や概要、各種競技に関する事項についても学ぶ。到達目標は、①障がい種別の特性とスポーツとのかわりを理解する、②各障がいに応じたスポーツ指導上の留意点について理解する、③全国障害者スポーツ大会の概要、実施競技、障がい区分などについて理解することとする		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 教 育 科 目	競 技 コ ス ポ ー ツ コ ー ス	競技スポーツ技術論	本授業では、様々な運動・スポーツにおける技術をバイオメカニクス、運動生理学、機能解剖学などの自然科学の立場だけでなく、経験や実践から得られるものまで多面的に学習する。さらに、実践への応用を促すために、コーチングやトレーニングにおいて技術を分析・評価する際の留意点についても学習する。到達目標は、①走る、跳ぶ、投げるなどの基本運動における技術について理解する、②球技スポーツにおける技術を個人、グループ、チームに着眼して理解する、③格闘技における技術を、空手を手がかりにして理解することとする。 (オムニバス方式/全15回) (19 荻山 靖/5回) 1～5回:個人種目・個人技能系 (18 安田 貢/5回) 6～10回:球技系 (29 片田貴士/5回) 11～15回:格闘技系	オムニバス方式
		競技スポーツ戦術論	トップアスリートの競技力向上を前提として、戦術の重要性やあり方について理解するとともに、戦術立案に関する基礎・基本的な理論を身につけ、さらにはサッカー、バスケットボール、陸上競技:長距離・駅伝を中心に競技スポーツの現場で行われている戦術の現状や課題を学習することによって、自身のおかれた立場に応じた戦術を立案するための方法論を習得する。到達目標は、①トップアスリートの競技力向上を目指す上での戦術の重要性とあり方を理解する、②競技スポーツにおける戦術立案に関する基礎的・基本的理論を身につける、③競技スポーツ現場で実践されている戦術やその課題について理解する、④競技スポーツの場面において戦術を立案できる能力を身につけることとする。 (オムニバス方式/全15回) (8 SHEAHAN, John Patrick/6回) 1～6回:戦術のあり方、及びサッカーにおける戦術 (28 飯島理彰/4回) 7～10回:陸上競技長距離における戦術 (22 梅崎英毅/5回) 11～15回:バスケットボールにおける戦術、及びまとめ	オムニバス方式
		競技スポーツ体力論	競技パフォーマンスを高めるためには、体力、心理、技術及び戦術などの各要素を明らかにしたうえで、それらの要素を高めるための適切なトレーニングを実施する必要がある。本講義では、体力的な側面から競技パフォーマンスを捉え、体力を高めるためのトレーニング方法、体力測定方法及びコンディショニング評価方法について学習する。到達目標は、①体力的な側面から競技パフォーマンスを捉え、理解する、②各々の競技に必要な体力要素を理解する、③必要な体力を高めるためのトレーニング方法を理解する、④トレーニングがオーバートレーニングやコンディショニング及ぼす影響を理解する、⑤長期的なトレーニング計画や試合前のテーピングの方法を理解することとする。	
		競技スポーツ心理論	スポーツを行う際に、心・技・体という言葉をよく聞く。練習ではできているのに、試合では実力が発揮できないという経験を有している選手も多いことであろう。自分自身のスポーツ現場での心の動きについての知識を学び、スポーツ活動や運動パフォーマンスを促進するために必要な心理的スキルを理解しながら、スポーツ現場特有の心理的現象やその対処法について概説する。到達目標は、①スポーツ活動や運動パフォーマンスを促進するために必要な心理的スキルを理解する、②スポーツ現場特有の心理的現象やその対処法についての認識を深める、③スポーツ競技者の心理的問題・課題に対して適切な判断と対応ができる、④本授業で得られた知見を基に今後の競技生活に活かしていくこととする。	
		競技スポーツ傷害論	スポーツの現場では、状況によりありとあらゆる外傷や障害が発生する。将来、指導者やアスレティックトレーナーを志すのであれば、そのスポーツ外傷・障害に対して適切な対処方法を習得することが重要である。本授業では、アスリートに起こり易い体幹、上肢、下肢及びその他のスポーツ外傷・障害に分けて、病態、発生機転、措置、評価法、予防法などについて学ぶ。到達目標は、①スポーツ外傷・障害を理解し説明することができる、②スポーツ外傷・障害を評価することができる、③スポーツ外傷・障害に対して適切な対応ができることとする。	
		競技スポーツ栄養論	この授業では、トップアスリートの競技力向上を目指した食事と栄養について、効果的に実践するために必要な基礎的理論を学習する。授業を通して、競技スポーツ選手にとっての食事と栄養摂取を体の成り立ち、トレーニング内容とリンクさせて理解するとともに、将来指導現場に立つために必要な基礎的知識と実践能力を身に付ける。到達目標は、①競技スポーツ選手にとって必要な食と栄養について理解する、②体の各部位と栄養素の関係を理解する、③トレーニング内容、時期、タイミング(目的)に則した必要な栄養素を理解する、④各自が自分にとって最適な食事(栄養摂取)を行えるようにすることとする。	
		競技スポーツ演習1(マネジメント)	現代スポーツでは、トップアスリートのオリンピックやワールドカップでの活躍が、多くの国民に夢と希望、活力を与えるものとして捉えられている。そこで、競技強化のため、また競技力向上のため、国やスポーツ統括団体、各スポーツ種目競技団体等は、様々なプランの作成やシステムの構築をしている。本演習では、我が国における様々な競技強化・競技力向上のプランやシステムに関する知識や理解を深めるとともに、それらが抱える問題や課題、対策等についての討議を行う。到達目標は、①現代スポーツの競技強化・競技力向上における諸問題について理解する、②我が国における競技強化・競技力向上に関するプランやシステムを理解する、③我が国における競技強化・競技力向上に関するプランやシステムの問題点や課題を明らかにする、④競技強化・競技力向上に関するプランやシステムの問題解決のための方策を検討することとする。	
		競技スポーツ演習2(バイオメカニクス)	本授業では、バイオメカニクスの手法による技術(動作)の評価法を、実験(測定、分析、評価)をとおして学ぶ。ここでは、短距離走、持久走、跳躍運動、体力(筋力・パワー)トレーニング手段としてのスクワット運動などを対象にして、それぞれの技術(動作)を評価するのに適した測定方法、分析方法、評価方法を、各種の実験をとおして習得する。また、バイオメカニクスの手法による技術の評価における留意点、及び有用性と限界についても学ぶ。到達目標は、①技術(動作)を評価する様々なバイオメカニクスの手法があることを理解する、②バイオメカニクスの手法を用いて各種運動・スポーツの技術(動作)の評価ができるようになる、③バイオメカニクスの手法による技術(動作)の評価法の有用性と限界、信頼性と妥当性などについて理解することとする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	競技スポーツ科目群	競技スポーツ演習3 (ゲーム分析)	本授業では、球技スポーツを中心としたゲーム分析のさまざまな方法および評価法を学ぶ。特に、競技別に競技力を評価できるデータとは何かを明確にして、ビデオ分析に使われるソフトの有用な利用方法の学習をとおして、動作分析、パターン分析、データ収集及び解釈、データ保管 (Archiving) などの方法について理解を深める。到達目標は、①専門としている競技種目のゲーム分析に有用なデータ収集・分析能力を身に付ける、②分析したデータを分かりやすく簡潔に現場の指導者にフィードバックできるようになることとする。
		競技スポーツ演習4 (体力)	体力的な側面からみた場合、競技パフォーマンスを向上させるためには、(1) 競技特性に応じた体力要素の分析、(2) 必要な体力要素を向上させるためのトレーニング計画の作成・実施、(3) トレーニング効果を把握するための形態及び体力の測定・評価、などが重要となる。本授業では、このうち、(3) トレーニング効果を把握するための形態及び体力の測定・評価法を、実習をとおして修得する。到達目標は、①測定・評価における信頼性及び妥当性の概念を理解する、②形態の測定・評価法を修得する、③無酸素性能力の測定・評価法を修得する、④有酸素性能力の測定・評価法を修得する、⑤サイバネティクス系の体力測定・評価法を修得する、⑥フィールドテストによる体力測定・評価法を修得する、⑦各種フィールドテストとラボテストの関係を理解することとする。
		競技スポーツ演習5 (心理)	スポーツ指導者や選手間でメンタルトレーニングの必要性が強く意識されるようになり、急激に関心が高まっている。競技力向上あるいは実力発揮のためのメンタルトレーニングの理論と方法を実践的に学び、スポーツ選手が自分の“こころ”をコントロールできることの重要性を学習する。また、メンタルトレーニングは万能薬ではないことも理解する。到達目標は、①メンタルトレーニング技法の基礎を学び、競技生活に活かす、②選手が自立して自分のこころを自分でコントロールできるようになる、③生理学的指標や質問紙を手掛かりに可視化できない“こころ”の状態を評価することとする。
		競技スポーツ演習6 (傷害)	現在のスポーツ界では、怪我をしてから復帰するまでを安全かつ速やかに進められることが望まれている。従来の病院で行われてきた社会復帰までのリハビリの後、スポーツに復帰するまでをアスレティック・リハビリテーションと捉え、医療機関・鍼灸師・柔道整復師・理学療法士などの専門職の方々と連携し、競技現場でアスレティック・リハビリテーションを施すプロフェッショナルな人材が必要とされている。このアスレティック・リハビリテーションの考え方や技術・方法(技法)を、部位と外傷・障害と関連づけて詳細に学び、競技現場において実践・指導できるようにする。到達目標は、①アスレティック・リハビリテーションの考え方や技法について理解する、②物理療法と補装具について理解する、③温熱療法・寒冷療法を実践・指導できる知識、技法を身につける、④各々の外傷・障害に適したアスレティック・リハビリテーションを実践・指導できる知識、技法を身につけることとする。
		現代スポーツ論	現代社会におけるスポーツは、政治・経済・教育などを含む我々の社会生活に大きな影響を与える文化現象となっている。そのスポーツに関わる様々な現象や主題を取り上げて、それらの基本的事項を学習するとともに、それらと我々の身近な現象や社会との関係について、多面的な視点から講義する。最終的に、現代スポーツ文化の光と影について理解を深め、現代社会におけるスポーツの状況と課題を学ぶ。到達目標は、①スポーツを文化として捉える視点を理解する、②現代社会におけるスポーツの現象を理解し、多面的な視点から説明できるようになる、③現代社会におけるスポーツの課題を理解し、説明できるようになる、④日本のスポーツ文化の特徴と課題を理解し、説明できるようになる、⑤現代スポーツの課題を克服するための視点を身につけることとする。
		生涯スポーツ政策論	昭和36(1961)年に制定され、日本のスポーツの発展に大きく貢献してきた「スポーツ振興法」が、制定から50年後の平成23(2011)年に全部改正され、「スポーツ基本法」が成立した。また、平成年代に入り、日本のスポーツ行政は、中央省庁の改編、スポーツ振興基本計画の策定・告示、独立行政法人の促進など、大きな変化がみられる。本講義では、わが国のスポーツ政策について紹介するとともに、その現状と課題を学習する。到達目標は、①日本のスポーツ行政組織とスポーツ財政について理解する、②日本のスポーツに関する法律と行政計画について理解する、③日本におけるスポーツ政策の形成過程とアクターを理解する、④日本のスポーツに関する具体的な政策の内容を理解し、説明できるようになる、⑤日本のスポーツ政策の課題を理解し、説明できるようになることとする。
競技スポーツ科目群	競技スポーツ科目群	生涯スポーツプロモーション論	現代社会におけるスポーツでは、人びとが生涯にわたってスポーツを楽しみ、その質的な充実と向上が求められている。また、「官」が主導してスポーツを「振興」させることから、「民」からスポーツを「プロモーション」(前進、推進)していくことが必要とされている。そこで、本講義では、生涯スポーツ論及びスポーツプロモーション論について学習し、スポーツをプロモーションする民間スポーツ組織について現状と課題を学ぶ。到達目標は、①生涯スポーツ論の概念と視点を理解する、②ライフステージ論とライフスタイル論の概念と視点を理解する、③スポーツプロモーション論の概念と視点を理解する、④生涯スポーツ論及びスポーツプロモーション論的視点から、民間スポーツ組織の現状と課題を理解し、説明できるようになる、⑤生涯スポーツプロモーションのビジョンと課題を理解し、説明できるようになることとする。
		生涯スポーツマネジメント論	スポーツに関するマネジメントは対象、内容ともに幅広い分野にまたがる。この授業ではリーグ、クラブ、チーム、選手、ファン、施設といったマネジメントの対象別にそのマネジメントの特徴を学んでいく。日本と海外、種目によるマネジメントの違いなどにも注目しながらスポーツマネジメントの基本概念について学ぶ。到達目標は、①スポーツマネジメントの対象を理解する、②スポーツ組織のガバナンス、マネジメントについて理解する、③スポーツファンのマネジメントについて理解する、④スポーツ選手のマネジメントについて理解する、⑤スポーツに関わる基本的な法知識について理解することとする。
		生涯スポーツマネジメント論	スポーツに関するマネジメントは対象、内容ともに幅広い分野にまたがる。この授業ではリーグ、クラブ、チーム、選手、ファン、施設といったマネジメントの対象別にそのマネジメントの特徴を学んでいく。日本と海外、種目によるマネジメントの違いなどにも注目しながらスポーツマネジメントの基本概念について学ぶ。到達目標は、①スポーツマネジメントの対象を理解する、②スポーツ組織のガバナンス、マネジメントについて理解する、③スポーツファンのマネジメントについて理解する、④スポーツ選手のマネジメントについて理解する、⑤スポーツに関わる基本的な法知識について理解することとする。

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 教 育 科 目	a 科 目 群	スポーツビジネス論	メガスポーツの進展は、スポーツとビジネスを一層密接な関係へと発展させている。特に、1988年ソウルオリンピック以降、その傾向はさらに活発になってきているといわれている。本授業では、現在のスポーツとビジネスの切っても切れない関係となっている現状を理解し、スポーツとビジネスの関係について、主にメガ・スポーツ・イベント、プロ・スポーツ、スポーツ用品メーカー、スポーツ・ツーリズム産業などを事例に、その現状と課題を学習し、スポーツビジネスについての理解を深めていくところに授業の目標をおく。到達目標は、①メガ・スポーツ・イベント(オリンピックとサッカーW杯)及び日本におけるプロ・スポーツ(Jリーグ、プロ野球)がビジネスとして成立する構造を理解する、②スポーツ用品ビジネスの現状と課題を理解する、③スポーツ・ツーリズムの現状と課題を理解する、④現代スポーツとビジネスとの関係について、現状と課題を説明できることとする。	
		スポーツマーケティング論	理論的背景を理解することによるコンセプトづくりに授業の主眼点をおく。比較的学としての歴史の浅いマーケティング論は、近年様々な分野において応用されている。その根拠を理解するために経営学におけるマーケティング論の位置づけを検討する。また、その関連する科目を理解する。新商品、ヒット商品、ロングラン商品等に大いに興味と関心をもって授業に臨むことが望ましい。また、各種媒体による広告にも関心をもち検証・分析をする。事例を大いに活用することで理解を深めたい。特に、スポーツ商品の特殊性に格別な注意力が要求されるため、関連する市場動向は日常から神経を注ぐことが要求される。到達目標は、①マーケティングのコンセプトづくり、②スポーツとマーケティングの関係理解、③スターの出現、ブーム発生、季節等に関連する市場動向理解とする。	
	b 科 目 群	レクリエーション論	現代社会において、余暇生活のあり方、レクリエーションの考え方は、人の生活の質(QOL: Quality of Life)を決定づける重要な要素となっている。本授業では、レクリエーションの基礎理論、支援方法について説明し、生きがいづくりとしてのレクリエーション活動について理解を深める。到達目標は、①レクリエーションの定義とその意義について理解を深める、②レクリエーションの意義について、生活の質と関連づけて理解を深める、③レクリエーションプログラムの作成方法について理解を深めることとする。	
		健康体力論	高齢化社会の到来や産業構造の変化などにより、人々の健康への意識はますます高まっている。その一方で、生活習慣病に悩む人や日常生活に介助が必要な高齢者は増加している。人生の様々な段階において健康のために体力の維持・向上に取り組むことは、今後ますます注目され、体育・スポーツを専攻する者の役割はより重要になるであろう。本授業では、健康づくりと関連する体力の概念、体力づくりの意義、体力づくりの実際(目標、計画、実践の方法)および体力の測定と評価方法について学ぶ。到達目標は、①健康・体力の概念を理解するとともに、相互関係について理解できる、②体力を構成する要素ごとにそれらを高めるための手段について理解できる、③体力づくりの指導/実践に際して、発育発達における各段階ごと、および特別な配慮が必要な対象ごとに留意すべき点を理解できる、④実践に役立つ体力の測定と評価を行うための方法について理解できることとする。	
		健康心理論	WHOによれば、健康とは身体的、精神的ならびに社会的に完全に良好な状態であって、単に疾病や虚弱でないというだけではないと定義されている。こうした状況に対応して、1980年代から健康心理学という新たな学問体系が台頭し、発展してきた。健康を心理学的に理解し予防・維持・増進するための具体的な方法を社会環境・社会生活・生涯の各段階の視点から学ぶ。到達目標は、①健康を心身の総合的な視点から理解する、②人間の心と体の健康を維持・増進し、疾病を誘発するリスク要因を理解する、③日常生活行動を点検分析し、その課題点を見つけ出し、それらを改善点として把握し、自己の健康管理意識を高め、実生活に活かすこととする。	
		子どもスポーツ論	スポーツは、オリンピックなどの競技スポーツと健康づくりを目的とした健康スポーツに大別される。それぞれのスポーツの持つ価値やその意義は、子どもと高齢者、男性と女性、競技者と健康者など、対象者や目的に応じて大きく異なる。本授業では、子どもと成長におけるスポーツの意義や価値、トレーニング(運動)やコーチング(指導)のあり方などについて理解を深めていく。また、学習指導要領に示されている運動やスポーツが心身の発達に与える効果についても学ぶ。到達目標は、①子どもを取り巻くスポーツの現状や諸問題を理解する、②子どもの成長からみたスポーツの意義を理解する、③子どもの発育発達に応じたトレーニング、コーチングのあり方を理解する、④子どものスポーツ参加を促す方策について理解を深める。	
		高齢者スポーツ論(要介護者を含む)	わが国は世界でも類を見ない高齢社会を迎えつつあり、社会保障や医療・介護の負担が年々重みを増している。また高齢化に伴う余暇時間の増大によって、長い人生においていかに質の高い生活を送るか?という課題も提起されている。高齢者が自立していきいきと日々を過ごす社会を実現することは重要な課題であり、スポーツの果たす役割も大きい。本授業では、高齢者に関連する我が国の社会制度、高齢者の心身の特性、高齢者がスポーツ活動を行う意義とその実践方法、および高齢者にスポーツ指導を行う際の留意点について学ぶ。到達目標は、①高齢者に関連する社会保障、健康保険制度について理解できる、②高齢者の身体的、心理的特性を理解できる、③高齢者がスポーツ活動を行う意義について説明できる、④高齢者が運動・スポーツを行う際の基準や指針を理解できる、⑤高齢者が運動・スポーツを行う際の実践上の注意点について説明できることとする。	
		障がい者スポーツ論	一般にスポーツは体力、年齢、性別の違いを、用具やルールを工夫して行われている。障がい者のスポーツは、用具やルールの工夫によって健康者と同じスポーツを行うことが可能であるという理念の基に行われている。スポーツは万人のものであり、障がいを負った人だけでなく、高齢者や子ども、そして運動の苦手な人すべてを含んでいる。障がいに対する知識や理解を深め、誰もができるユニバーサルなスポーツ活動について学ぶ。到達目標は、①障がい者についての理解を深める、②障がい者スポーツの歴史、果たす役割や意義について理解する、③障がい者のスポーツ指導法について学ぶこととする。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 教 育 科 目	生 涯 コ ス ポ ー ツ 科 目 群	生涯スポーツ演習1 (スポーツプロモーション)	本演習では、これからの目指すべきスポーツ (のあり方) に対して、現代スポーツの問題・課題及びそれらが生じる構造的背景を検討する。そして、その問題・課題を解決するためのスポーツプロモーション政策、施策、制度、システム等を考案し、その可能性と実現のための課題を考える。以上を、グループで議論し、発表と批評を行う。なお、グループ討議の前には、必要な考え方や事例を紹介する。到達目標は、①スポーツプロモーションの視点からこれからの目指すべきスポーツ像を描くことができるようになる、②現代スポーツの問題及びその問題が生じる構造を理解し、説明できるようになる、③現代スポーツの問題を解決するためのスポーツプロモーション政策、施策、制度、システム等を考案し、その可能性と課題を説明できるようになることとする。	
		生涯スポーツ演習2 (スポーツマネジメント)	スポーツの現場でのマネジメントを実践的に学ぶ。具体的には自分達でスポーツイベント (教室、大会、イベント等) を企画実施する中でマネジメントのPDCAサイクルを学ぶ。また、企画書、報告書、概要書、チラシ、進行表など実務的資料の作成についても実践的に学ぶ。到達目標は、①企画書、報告書等の資料が作成できるようになる、②目的、対象に応じた企画が立てられるようになる、③PDCAサイクルを理解する、④企画力、コミュニケーション力、実行力を養うこととする。	
		生涯スポーツ演習3 (スポーツビジネス)	現代では、オリンピックやワールドカップ等のメガ・スポーツ・イベントだけでなく、週末や1日で完結するスポーツ・イベントが盛んに行なわれている。本演習では、マーケティング調査についての基本的事項を学び、実際に調査及びイベント企画・実施を行う。グループごとに調査内容を検討・実施・評価・分析し、その結果からイベントの企画・実施・評価・分析を行い、適宜成果を発表する。到達目標は、①マーケティング調査の理論と方法、調査結果の評価と分析の方法について理解する、②スポーツにかかわるマーケティング調査について、内容の検討、調査実施、結果集計、結果の評価・分析ができるようになる、③スポーツにかかわるマーケティング調査結果に基づいて、スポーツ・イベントを企画・実施・評価・分析ができるようになることとする	
		生涯スポーツ演習4 (子どものスポーツ活動)	子どもにとってスポーツは、心身の発育、生涯にわたる健康づくりの基盤を形成する上で重要な意義を持つ。本授業では、幼児から児童までを対象としたスポーツ活動の企画から指導までを自分たちで行い、これを通して、子どもの成長段階に応じたスポーツ活動のあり方について理解を深め、企画能力、マネジメント能力、指導能力などの実践力を育成する。 ・子どもの成長からみたスポーツの意義と、活動のあり方について理解を深める。 ・対象に応じたスポーツ活動の企画能力、マネジメント能力、指導能力を高める。 ・子どもの発育発達に応じたトレーニング、コーチングのあり方を理解する。	
		生涯スポーツ演習5 (高齢者・要介護者のスポーツ活動)	高齢者が運動・スポーツを楽しむ機会が増えているが、高齢者はその健康度や体力水準に大きな個人差があり、各種の疾患を持っていることも多いために、運動・スポーツ活動を指導する際には十分な配慮が必要である。本演習においては、高齢者の運動・スポーツ活動を指導するための実践的な能力を身に付けるため、運動開始前の聞き取りや体力の測定と評価、およびニュースポーツ、ウォーキングなどの軽運動および介護予防体操などの指導法について実習を交えつつ学ぶ。到達目標は、①高齢者を対象とした運動・スポーツ活動について指導上の留意点を理解できる、②高齢者を対象とした運動・スポーツ活動を指導するための実践的な知識を身に付けることができる、③高齢者を対象とした運動・スポーツ活動を指導するための基礎的な能力を身に付けることができることとする。	
		生涯スポーツ演習6 (野外活動・教育)	自然の中で行われる野外活動は、人の健康、教育、生きがいづくりに深く関わるものである。本授業では、近郊山野をフィールドとした野外活動プログラムを学生が主体となって企画し、実践していく。企画・運営、評価のサイクルを通して、生涯にわたって野外活動を実践していくための基礎的な能力を育成することを目的とする。到達目標は、①対象と目的に応じた野外活動プログラムの企画・運営能力を高める、②近郊山野でのトレッキング (軽登山) の実践能力を高める、③プログラムの評価、改善方法について理解を深める、④野外活動における基礎的な安全管理の方法について理解を深める、⑤生き方や興味関心に応じた野外活動の実践方法について理解を深めることとする。	
		生涯スポーツ演習7 (健康運動指導等研修 (事前事後指導を含む))	健康産業施設等において、実際に一定期間、運動指導の現場体験を行うことで、運動指導者としての知識、技術の向上を図り、実践・実務能力を身に付ける。健康運動指導士として、活動現場における役割等を体験理解する。この演習は、健康産業施設等において、7日間40時間の実習を行うものである。現場実習前にはガイダンスおよび学内施設での事前指導を、実習後には事後指導を行う。到達目標は、①見学・実習を通して、健康産業施設の意義・役割を理解する、②見学・実習を通して、活動現場における接遇・役割等を体験理解する、③見学・実習を通して、施設管理業務および運動指導について学ぶ、④見学・実習を通して、運動指導者としての知識・技術を高めることとする。	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
キ ャ 群 リ コ ー チ ン グ 目 系	種目別コーチング演習 1 (陸上競技: 短距離・障害)	陸上競技の短距離・障害種目は、スプリント系の種目として位置づけられており、わが国の競技成績はとくに男子のリレー種目において国際的に優れた成績を挙げている。本学では、平成(2016)年度から強化育成クラブとなる予定である。本授業では、前期においては短距離・障害種目のコーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積すること(課題1)(担当: 太田 涼、後期においてはそれらを踏まえて自分自身やチーム(リレー)の競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案すること(課題2)(担当: 麻場 徳)を目的とする。課題1・2ともに、個人またはグループで取り組み、その成果を前期及び後期の授業終了時に「種目別コーチング演習」の履修生を交えた場で発表する。到達目標は、①短距離・障害種目の様々な特性を理解する、②短距離・障害種目のコーチング(トレーニング)に有用な様々な知見や技法を身につけ、それらをコーチング計画(トレーニング計画)の作成に活かすことができる、③公開の場での発表会をとおして、他の競技種目の特性やコーチング法(トレーニング法)などについて理解を深める、④課題の遂行をとおしてコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを身につけることとする。 (オムニバス方式/全30回) ① 太田 涼/15回 前期:「課題1: コーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積する」を担当 ② 麻場 徳/15回 後期:「課題2: 自分自身及びチーム(リレー)の競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案する」を担当	オムニバス方式
	種目別コーチング演習 2 (陸上競技: 長距離・駅伝)	陸上競技の長距離種目は、古代オリンピックから実施されている歴史の古い競技であり、わが国はとくにマラソンにおいて男女ともにオリンピックなどの国際的に優れた成績を挙げている。一方駅伝は、わが国の風土のもとで生まれ育った競技であり、本学は「箱根駅伝」の常連校として名を馳せ、これまで3回の優勝を達成している。また、オリンピックの代表選手も輩出している。本授業では、前期においては長距離種目や駅伝のコーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積すること(課題1)(担当: 飯島理彰、後期においてはそれらを踏まえて自分自身やチーム(駅伝)の競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案すること(課題2)(担当: 上田誠仁)を目的とする。課題1・2ともに、個人またはグループで取り組み、その成果を前期及び後期の授業終了時に「種目別コーチング演習」の履修生を交えた場で発表する。到達目標は、①長距離種目や駅伝の様々な特性を理解する、②長距離種目や駅伝のコーチング(トレーニング)に有用な様々な知見や技法を身につけ、それらをコーチング計画(トレーニング計画)の作成に活かすことができる、③公開の場での発表会をとおして、他の競技種目の特性やコーチング法(トレーニング法)などについて理解を深める、④課題の遂行をとおしてコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを身につけることとする。 (オムニバス方式/全30回) ② 飯島理彰/15回 前期:「課題1: コーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積する」を担当 ③ 上田誠仁/15回 後期:「課題2: 自分自身及びチームの競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案する」を担当	オムニバス方式
	種目別コーチング演習 3 (水泳)	水泳競技は、わが国では男女ともに伝統的にオリンピック等の国際大会で優れた成績を挙げている。本学も水泳競技に力を入れており、オリンピックのメダリストも輩出している。本授業では、前期においては水泳競技のコーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積すること(課題1)、後期においてはそれらを踏まえて自分自身やチーム(団体)の競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案すること(課題2)を目的とする。課題1・2ともに、個人またはグループで取り組み、その成果を前期及び後期の授業終了時に「種目別コーチング演習」の履修生を交えた場で発表する。到達目標は、①水泳競技の様々な特性を理解する、②水泳競技のコーチング(トレーニング)に有用な様々な知見や技法を身につけ、それらをコーチング計画(トレーニング計画)の作成に活かすことができる、③公開の場での発表会をとおして、他の競技種目の特性やコーチング法(トレーニング法)などについて理解を深める、④課題の遂行をとおしてコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを身につけることとする。	
	種目別コーチング演習 4 (スケート)	スピードスケート競技は、ロングトラックとショートトラックで行われ、いずれにおいてもわが国は男女ともに短距離種目でオリンピック等の国際大会で活躍している。本学は、男女ともにオリンピックなどの国際大会出場者を数多く輩出している。本授業では、前期においてはスピードスケートのコーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積すること(課題1)、後期においてはそれらを踏まえて自分自身やチーム(リレー)の競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案すること(課題2)を目的とする。課題1・2ともに、個人またはグループで取り組み、その成果を前期及び後期の授業終了時に「種目別コーチング演習」の履修生を交えた場で発表する。到達目標は、①スピードスケートの様々な特性を理解する、②スピードスケートのコーチング(トレーニング)に有用な様々な知見や技法を身につけ、それらをコーチング計画(トレーニング計画)の作成に活かすことができる、③公開の場での発表会をとおして、他の競技種目の特性やコーチング法(トレーニング法)などについて理解を深める、④課題の遂行をとおしてコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを身につけることとする。	
	種目別コーチング演習 5 (バスケットボール)	バスケットボールは、わが国では古くから学校体育の中心的な種目として取り扱われているが、わが国の国際的競技レベルは高いとはいえない状況である。本学の競技レベルは、強化育成クラブとして設立後間もないクラブであるが、女子においては関東大学トーナメント選手権で優勝している。本授業では、前期においてはバスケットボールのコーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積すること(課題1)、後期においてはそれらを踏まえて自分自身やチームの競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案すること(課題2)を目的とする。課題1・2ともに、個人またはグループで取り組み、その成果を前期及び後期の授業終了時に「種目別コーチング演習」の履修生を交えた場で発表する。到達目標は、①バスケットボールの様々な特性を理解する、②バスケットボールのコーチング(トレーニング)に有用な様々な知見や技法を身につけ、それらをコーチング計画(トレーニング計画)の作成に活かすことができる、③公開の場での発表会をとおして、他の競技種目の特性やコーチング法(トレーニング法)などについて理解を深める、④課題の遂行をとおしてコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを身につけることとする。	
	種目別コーチング演習 6 (サッカー)	サッカーは、世界中の人々に興味関心のもっとも高い競技であり、わが国は男女ともに近年になって国際的に活躍をするようになっていく。本学の競技レベルは、強化育成クラブとして設立後間もないクラブであるが、男子は東京都大学リーグ1部上位レベルである。女子は創部1年目で関東大学リーグ2部に昇格した。本授業では、前期においてはサッカーのコーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積すること(課題1)、後期においてはそれらを踏まえて自分自身やチームの競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案すること(課題2)を目的とする。課題1・2ともに、個人またはグループで取り組み、その成果を前期及び後期の授業終了時に「種目別コーチング演習」の履修生を交えた場で発表する。到達目標は、①サッカーの様々な特性を理解する、②サッカーのコーチング(トレーニング)に有用な様々な知見や技法を身につけ、それらをコーチング計画(トレーニング計画)の作成に活かすことができる、③公開の場での発表会をとおして、他の競技種目の特性やコーチング法(トレーニング法)などについて理解を深める、④課題の遂行をとおしてコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを身につけることとする。	
	種目別コーチング演習 7 (ラグビー)	ラグビーは、わが国でのワールドカップ開催を控えて、国民の関心が高まり、競技レベルも急速に高まってきている。本学の競技レベルは、世界ジュニア大会の代表選手を輩出している。本授業では、前期においてはラグビーのコーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積すること(課題1)、後期においてはそれらを踏まえて自分自身やチームの競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案すること(課題2)を目的とする。課題1・2ともに、個人またはグループで取り組み、その成果を前期及び後期の授業終了時に「種目別コーチング演習」の履修生を交えた場で発表する。到達目標は、①ラグビーの様々な特性を理解する、②ラグビーのコーチング(トレーニング)に有用な様々な知見や技法を身につけ、それらをコーチング計画(トレーニング計画)の作成に活かすことができる、③公開の場での発表会をとおして、他の競技種目の特性やコーチング法(トレーニング法)などについて理解を深める、④課題の遂行をとおしてコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを身につけることとする。	
	種目別コーチング演習 8 (ホッケー)	ホッケーは、その起源が古代エジプトにあると言われる歴史の古い競技である。わが国の競技レベルはとくに女子がオリンピックに3回連続出場を果たしており、本学の選手もその代表選手として活躍している。また、男女ともに大学選手権でも複数回わたって優勝している。本授業では、前期においてはホッケーのコーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積すること(課題1)(担当: SHEAHAN, John Patrick)、後期においてはそれらを踏まえて自分自身やチームの競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案すること(課題2)を目的とする。課題1・2ともに、個人またはグループで取り組み、その成果を前期及び後期の授業終了時に「種目別コーチング演習」の履修生を交えた場で発表する。到達目標は、①ホッケーの様々な特性を理解する、②ホッケーのコーチング(トレーニング)に有用な様々な知見や技法を身につけ、それらをコーチング計画(トレーニング計画)の作成に活かすことができる、③公開の場での発表会をとおして、他の競技種目の特性やコーチング法(トレーニング法)などについて理解を深める、④課題の遂行をとおしてコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを身につけることとする。 (オムニバス方式/全30回) ⑥ SHEAHAN, John Patrick/15回 前期:「課題1: コーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積する」を担当 ⑩ 寺本祐治/15回 後期:「課題2: 自分自身及びチームの競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)の立案」を担当	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
A群	種目別コーチング演習9 (バレーボール)	バレーボールは、わが国では古くから学校体育の中心的な種目として取り扱われており、男女ともに過去にはオリンピック大会でメダルを獲得するなどの活躍をしていたが、近年はやや低迷状況にある。本学では、平成28(2016)年度から強化育成クラブになる予定である。本授業では、前期においてはバレーボールのコーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積すること(課題1)(担当:安田 貢)、後期においてはそれらを踏まえて自分自身やチームの競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案すること(課題2)を目的とする(担当:遠藤俊郎)。課題1・2ともに、個人またはグループで取り組み、その成果を前期及び後期の授業終了時に「種目別コーチング演習」の履修生を交えた場で発表する。到達目標は、①バレーボールの様々な特性を理解する、②バレーボールのコーチング(トレーニング)に有用な様々な知見や技法を身につけ、それらをコーチング計画(トレーニング計画)の作成に活かすことができる、③公開の場での発表会をとおして、他の競技種目の特性やコーチング法(トレーニング法)などについて理解を深める、④課題の遂行をとおしてコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを身につけることとする。(オムニバス方式/全30回) ④ 安田 貢/15回) 前期:「課題1:コーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法の集積」を担当 ④ 遠藤俊郎/15回) 後期:「課題2:自分自身及びチームの競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)の立案」を担当	オムニバス方式
	種目別コーチング演習10 (ソフトボール)	ソフトボールは、日本では古くから親しまれており、近年ではとくに女子がオリンピックで優勝するなどの活躍をしている。本学の競技レベル(女子)は、強化育成クラブとして設立後間もないクラブであるが、関東大学リーグにおいて多数回にわたって優勝している。本授業では、前期においてはソフトボールのコーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積すること(課題1)、後期においてはそれらを踏まえて自分自身やチームの競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案すること(課題2)を目的とする。課題1・2ともに、個人またはグループで取り組み、その成果を前期及び後期の授業終了時に「種目別コーチング演習」の履修生を交えた場で発表する。到達目標は、①ソフトボールの様々な特性を理解する、②ソフトボールのコーチング(トレーニング)に有用な様々な知見や技法を身につけ、それらをコーチング計画(トレーニング計画)の作成に活かすことができる、③公開の場での発表会をとおして、他の競技種目の特性やコーチング法(トレーニング法)などについて理解を深める、④課題の遂行をとおしてコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを身につけることとする。	
	種目別コーチング演習11 (柔道)	柔道は、明治15(1882)年に嘉納治五郎が「精力善用」「自他共栄」を基本理念として創始した武道であるが、現在では世界中で競技スポーツとして広く親しまれている。わが国の競技レベルは世界が強化されている中であつてもなお本家としての存在を示している。本学も柔道には力を入れており、とくに女子は大学選手権で多数回にわたって優勝し、世界選手権のメダリストも輩出している。本授業では、前期においては柔道のコーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積し(課題1)、後期においてはそれらを踏まえて自分自身やチーム(団体)の競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案すること(課題2)を目的とする。課題1・2ともに、個人またはグループで取り組み、その成果を前期及び後期の授業終了時に「種目別コーチング演習」の履修生を交えた場で発表する。到達目標は、①柔道の様々な特性を理解する、②柔道のコーチング(トレーニング)に有用な様々な知見や技法を身につけ、それらをコーチング計画(トレーニング計画)の作成に活かすことができる、③公開の場での発表会をとおして、他の競技種目の特性やコーチング法(トレーニング法)などについて理解を深める、④課題の遂行をとおしてコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを身につけることとする。	
	種目別コーチング演習12 (レスリング)	レスリングは、古代オリンピックから連続と続く競技である。わが国では、男女ともに競技レベルが高く、オリンピック大会でも多数のメダルを獲得している日本のお家芸とも言われるほどの競技である。本学もレスリング(男子)に力を入れており、オリンピック等の日本代表選手を輩出している。また、大学選手権でも多数回にわたって優勝している。本授業では、前期においてはレスリングのコーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積すること(課題1)、後期においてはそれらを踏まえて自分自身やチーム(団体)の競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案すること(課題2)を目的とする。課題1・2ともに、個人またはグループで取り組み、その成果を前期及び後期の授業終了時に「種目別コーチング演習」の履修生を交えた場で発表する。到達目標は、①レスリングの様々な特性を理解する、②レスリングのコーチング(トレーニング)に有用な様々な知見や技法を身につけ、それらをコーチング計画(トレーニング計画)の作成に活かすことができる、③公開の場での発表会をとおして、他の競技種目の特性やコーチング法(トレーニング法)などについて理解を深める、④課題の遂行をとおしてコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを身につけることとする。	
	種目別コーチング演習13 (空手道)	空手道は、その起源には諸説あり流派もいくつかあるが、現存しているいくつかの団体を統合した全日本空手道連盟がJOCの傘下にある。競技は形と組手に分けて行われている。本学の空手道部は男女ともに強化育成クラブとしての活動も活発で、男子は世界選手権で優勝するなどの実績を有している。本授業では、前期においては空手道のコーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積すること(課題1)、後期においてはそれらを踏まえて自分自身やチーム(団体)の競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案すること(課題2)を目的とする。課題1・2ともに、個人またはグループで取り組み、その成果を前期及び後期の授業終了時に「種目別コーチング演習」の履修生を交えた場で発表し、その内容を互いに共有する。到達目標は、①空手道の様々な特性を理解する、②空手道のコーチング(トレーニング)に有用な様々な知見や技法を身につけ、それらをコーチング計画(トレーニング計画)の作成に活かすことができる、③公開の場での発表会をとおして、他の競技種目の特性やコーチング法(トレーニング法)などについて理解を深める、④課題の遂行をとおしてコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを身につけることとする。	
	種目別コーチング演習14 (剣道)	剣道は、明治15(1882)年に嘉納治五郎が「精力善用」「自他共栄」を基本理念として創始した武道であるが、現在では世界中で競技スポーツとして広く親しまれている。わが国の競技レベルは世界が強化されている中であつてもなお本家としての存在を示している。本学も剣道には力を入れており、とくに女子は大学選手権で多数回にわたって優勝し、世界選手権のメダリストも輩出している。本授業では、前期においては剣道のコーチング法(トレーニング法)を確立していくために有用な様々な知見や技法を集積し(課題1)、後期においてはそれらを踏まえて自分自身やチーム(団体)の競技力の向上に資するコーチング計画(トレーニング計画)を立案すること(課題2)を目的とする。課題1・2ともに、個人またはグループで取り組み、その成果を前期及び後期の授業終了時に「種目別コーチング演習」の履修生を交えた場で発表する。到達目標は、①剣道の様々な特性を理解する、②剣道のコーチング(トレーニング)に有用な様々な知見や技法を身につけ、それらをコーチング計画(トレーニング計画)の作成に活かすことができる、③公開の場での発表会をとおして、他の競技種目の特性やコーチング法(トレーニング法)などについて理解を深める、④課題の遂行をとおしてコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを身につけることとする。	
B群	競技スポーツサポート演習1 (マネジメント)	現代スポーツでは、トップアスリートのオリンピックやワールドカップでの活躍が、多くの国民に夢と希望、活力を与えるものとして捉えられている。そこで、競技強化のため、また競技力向上のため、国やスポーツ統括団体、各スポーツ種目競技団体等は、様々なプランの作成やシステムの構築をしている。本演習では、競技スポーツ演習1(マネジメント)で「討議した我が国における様々な競技強化・競技力向上のプランやシステムの抱える問題や課題について、その解決策を見出すまでの過程を学習し、課題解決に資する能力養成をねらいとする。到達目標は、①現代スポーツの競技強化・競技力向上における諸問題について理解する、②我が国における競技強化・競技力向上に関するプランやシステムの抱える問題や課題を理解する、③課題解決のために必要な調査、分析、整理、報告といったプロセスを学習することとする。	
競技スポーツサポート系	競技スポーツサポート演習2 (バイオメカニクス)	バイオメカニクスは競技者の技術や体力を客観的に評価することができるため、コーチング・トレーニング実践に大いに役立てることができる。しかし、その際には測定環境や時間、使用可能な機器などの制約が付きまとうために、高い測定精度が要求される研究での測定とは区別すべき事項が多分に存在する。本授業では、このような実践場面のバイオメカニクス活用法について、測定・評価・診断の観点から学ぶとともに、実際にバイオメカニクスによる測定・評価・診断を行い、その結果をフィードバックする過程を通して、バイオメカニクスをコーチング・トレーニング実践に役立てるための観点や留意点、さらには限界について学ぶ。到達目標は、①研究と実践それぞれで要求されるバイオメカニクス測定法の相違について理解する、②バイオメカニクスによって評価・診断可能な諸能力や、測定可能な実践場面を理解する、③実践場面におけるバイオメカニクスの有用性と共に、その限界について理解する、④これらについて、実際に測定・評価・診断を行うことで理解を深めることとする。	
競技スポーツサポート系	競技スポーツサポート演習3 (戦術・ゲーム分析)	スポーツ競技力向上のための戦術について、各競技種目の特性だけではなくその国や地域における文化的背景の理解を含めて最適な戦術について研究する。専門としている競技の競技力向上のための戦術および練習法を明確にして具体的な活動方針について理解する。到達目標は、①国や競技団体が競技力向上を目指すための活動方針について理解する、②指導者としての基礎知識を取得して現場での指導法および問題解決能力を身につける、③活動方針およびチーム戦術における各個人の役割を明確にする、④ゲーム分析器を利用して戦術の有効性と各個人の役割達成を評価することとする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
B群 競技スポーツサポート系	競技スポーツサポート演習4(体力)	競技スポーツ現場においては、競技パフォーマンスを高めることを目的に、体力測定やトレーニング分析など様々なサポート活動が展開されている。本授業では、生理学・体力学的な側面から、競技力向上に資するためのサポート活動を考え、実践する。すなわち、受講者の興味やサポート内容に応じていくつかの小グループに分かれ、グループ毎にサポート活動を実践し、その内容や成果について議論する。到達目標は、①サポート対象競技のパフォーマンスを高めるための体力要素を明らかにする、②競技特性に応じた体力測定・評価を実施する、③トレーニングによる体力の変化を測定・評価を実践する、④トレーニングによるコンディションの変化を測定・評価を実践する、⑤トレーニングの定量評価を実践することとする。	
	競技スポーツサポート演習5(心理)	競技スポーツで心理的問題と思われる場面を学生自らが考え、ロールプレイング(カウンセラー、クライアント、オブザーバー)を体験し、クライアントのさまざまな主訴の背景を理解し、共に問題解決を成し遂げる態度を養う。さらに中高年や本学トップ選手を対象とした事例検討を行い、問題解決や競技力向上に向けた実行可能性を有する方策を考える力や必要な知識を自主的に学ぶ態度も養う。到達目標は、①ロールプレイングを通してスポーツ選手の心理支援を学び、実践技能を習得する、②スポーツ全般の知識習得に向けて意欲的に取り組む、③自分の価値観を確認し、他人の価値観も認め、問題解決に向けた方策を習得する、④所属チームでメンタルトレーナーとしての実務経験の蓄積に努めることとする。	
	競技スポーツサポート演習6(傷害)	現在のスポーツ界では、選手やチームに必要とされる「アスレティック・トレーナー」「メディカル・トレーナー」が専門職として存在する。専門職として現場の要求に対処するためには、より専門的なアドバイスやサポートが求められているので、スポーツ科学の進化にもなあって発達している様々な知識や技法を身につけなければならぬ。この授業では、第一線で活躍しているアスレティック・トレーナー(トレーナー)の活動状況の把握、本学の強化育成クラブを対象にした実習などを通して、トレーナーに要求される知識や技法を専門的・実践的に学ぶ。到達目標は、①トレーナーとはどのような職業であるのか把握する、②スポーツ現場で活躍するトレーナーの実態、知識・技術を把握する、③必要な知識と技法を実践的に学び習得することとする。	
	生涯スポーツサポート演習1(スポーツプロモーション)	スポーツ社会学、スポーツ経営学等の専門基礎科目および生涯スポーツ政策論、生涯スポーツプロモーション論等の専門発展科目を踏まえ、特に生涯スポーツにかかわる官・民・産の各分野における現状と課題をまとめる。そして、各分野で活躍されている講師を招き、その最前線の活動や課題について講義を受け、それを踏まえて、再度、各分野における課題を整理し、その課題解決のためのプロモーション方策を検討する。到達目標は、①スポーツ行政、民間スポーツ組織、スポーツ産業の現状と課題を理解する、②スポーツ行政、民間スポーツ組織、スポーツ産業の最前線の活動や課題を理解する、③スポーツ行政、民間スポーツ組織、スポーツ産業の現状と最前線の活動を踏まえ、各分野における解決すべき課題を抽出し、その課題解決のためのプロモーション方策を立案することができるようになることとする。	
	生涯スポーツサポート演習2(スポーツマーケティング)	多国間におたるスポーツ活動は、様々な影響から今日の姿へと急激に発展し、変貌を成し遂げている。なかでも、近年マーケティング活動は、その中心的な役割をはたしているといえよう。本演習では、スポーツマーケティングに関する実態を理論および実証研究の両側面から考察し、検証をおこないレポートとしてまとめる。特に、スポーツとマーケティングの検証は、実地調査を通して理解する。また、世界における日本のスポーツの役割と位置づけを現在地を確認することから検証する。到達目標は、①マーケティング調査の理論と方法、調査結果の評価と分析の方法について理解する、②スポーツにかかわるマーケティング調査について、内容の検討、調査実施、結果集計、結果の評価・分析ができるようになる、③スポーツにかかわるマーケティング調査結果に基づいて、スポーツ・イベントを企画・実施・評価・分析ができるようになることとする。	
	生涯スポーツサポート演習3(子どもスポーツ)	子どもにとってスポーツは、心身の発育、生涯にわたる健康作りの基盤を形成する上で重要な意義を持つ。本授業では、「子どもスポーツ論」「生涯スポーツ演習(子どものスポーツ活動)」をベースに、実際にフィールドに出て幼児から児童までを対象としたスポーツ活動をサポートし、体験を通して学ぶ。子どもの学校スポーツ・地域スポーツ、エリートスポーツ等々の実態を知ること、子どものスポーツのあり方について理解を深めるとともに、企画能力、マネジメント能力、指導能力などの実践力を育成し、サポート能力を高める。到達目標は、①学校スポーツ、地域スポーツ、エリートスポーツ等の子どものスポーツ活動のあり方について実践を通して理解する、②対象に応じたスポーツ活動の企画能力、マネジメント能力、指導能力を高める、③対象に応じたスポーツ活動のサポート能力を高めることとする。	
	生涯スポーツサポート演習4(高齢者スポーツ)	高齢者を対象に運動・スポーツを指導する際には、対象者の特性に配慮した指導プログラムを作成するとともに、対象者(クライアント)との接し方についても状況に応じた配慮が必要である。本演習では、ニュースポーツ、ウォーキングおよび介護予防体操について学生達が自ら企画、立案したプログラムに基づいて、実際に高齢者を対象に指導を試みることを目的とする。この演習を通して、将来的に高齢者を対象にした運動・スポーツの指導に携わる際に必要となる実践的な知識や指導上の留意点、高齢者とのコミュニケーションの取り方を学ぶ。到達目標は、①高齢者を対象とした運動・スポーツ教室の企画・立案を行うことができる、②高齢者の運動指導時に配慮すべきポイントを理解できる、③高齢者に対して適切な運動・スポーツ指導を実際に行うことができることとする。	
	生涯スポーツサポート演習5(障がい者スポーツ)	本授業では、人が障がいを伴って生きること・生活することを理解し、必要な支援や社会のあり方について理解を深める。また、障がい者がスポーツを行うことの社会的意義について考察するとともに、実際に障がい者スポーツの実技を通して、健康者スポーツとの違いやスポーツ指導法について学ぶ。到達目標は、①障がいについての理解を深める、②スポーツ活動あるいは障がい者スポーツの社会的意義を理解する、③障がい者スポーツに必要な基礎知識と技術を身につけることとする。	
	生涯スポーツサポート演習6(傷害)	現在のスポーツ界では、選手やチームに必要とされる「アスレティック・トレーナー」「メディカル・トレーナー」が専門職として存在する。専門職として現場の要求に対処するためには、より専門的なアドバイスやサポートが求められているので、スポーツ科学の進化にもなあって発達している様々な知識や技法を身につけなければならぬ。この授業では、第一線で活躍しているアスレティック・トレーナー(トレーナー)の活動状況の把握、本学の強化育成クラブを対象にした実習などを通して、トレーナーに要求される知識や技法を専門的・実践的に学ぶ。到達目標は、①トレーナーとはどのような職業であるのか把握する、②スポーツ現場で活躍するトレーナーの実態、知識・技術を把握する、③必要な知識と技法を実践的に学び習得することとする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
C 群 生涯スポーツサポート系	生涯スポーツサポート演習6 (野外活動・教育)	自然の中で行われる野外活動は、人の健康、教育、生きがいづくりに深く関わる活動である。指導者として充実した活動を展開していくためには、高い実践能力、指導能力が求められる。本授業では、「野外活動・教育論」、「生涯スポーツ演習(野外活動・教育)」をベースに、子どもから成人までを対象とした野外活動プログラムのサポートを実践する。実際に指導の立場に立つことで、プログラムの企画・運営能力、指導能力を高めることを目的とする。到達目標は、①対象と目的に応じた野外活動プログラムの企画・運営能力を高める、②プログラムの組織的運営とサポート体制のあり方について理解を深める、③プログラムのサポート実践を通して、野外活動の基礎的な指導能力を高める、④プログラムの評価、改善方法について理解を深めることとする。		
	保健体育科教育法1 (体育)	中学校・高等学校における保健体育科の「体育」について学習指導要領に基づき、体育の性格及び目標や内容について学習する。また、生涯体育・スポーツにつながる授業づくりの基礎的な知識等を身に付けるため、教科の特性を生かした指導技術、年間計画や学習指導案の作成、学習指導の方法から評価のあり方などを学ぶ。到達目標は、①学習指導要領の考え方と、保健体育科の目標が理解できる、②体育分野・科目体育の目標と内容、各領域の特性と学習指導について理解できる、③年間計画、単元計画について理解し、学習指導案を作成することができる、④体育の学習指導の方法及び学習評価の基本的考え方について理解できることとする。		
	保健体育科教育法2 (保健)	中学校「保健体育」の保健分野、高等学校「保健体育」の教科保健について、その目標や学習内容を概観する(小学校「体育」保健領域も一部含める)。その上で、保健の学習計画、学習指導、評価を系統的に実践し、保健体育「保健」の学習指導案作成や授業づくりを行うための資質を高める。また様々な保健学習方法を学び、指導能力向上を目指す。到達目標は、①保健科教育の目的と意義について理解する、②保健の教育内容の概要を理解できる、③保健の評価方法(評価規準作成)について理解できる、④保健の学習指導案を作成することができる、⑤・保健の授業実践に必要な学習方法を理解し活用できることとする。		
	介護等体験実習(事前事後指導を含む)	小学校・中学校の教諭の普通免許状を取得しようとする者に「介護等体験」が義務づけられている。社会福祉施設や特別支援学校で安全で効果的な介護等体験の実習を行うにあたり、この目的や意義、実習の留意点を学び、社会福祉施設や特別支援学校における介護について事前に理解を深めておく。また、実習では、社会福祉や特別支援に関する知識、障がい者や高齢者に対する理解を深めるとともに、介護について学ぶ。実習後には、自分の体験をふり振り返り確認する。到達目標は、①介護等体験の目的と意義が理解できる、②実習における注意点を理解し、体験に臨む準備が整う、③社会福祉や特別支援教育、障がい者や高齢者に対する理解が深まる、④社会福祉施設や特別支援学校の概要について理解できる、⑤教育を目指す者が、個人の尊厳及び社会連携の理念に関する認識を深め、教員としてふさわしい資質が養われることとする。		
	保健体育科指導論	保健体育科の授業づくり及び学習評価、授業評価に関する知識やスキルの習得をテーマとして、中学校・高等学校における保健体育科の学習指導についての、基礎・基本的な事柄に関する理解を深める。また、授業づくりや授業展開の知識やスキルを身につけ、教科の特性を生かした学習計画の立案、学習指導案の作成のしかた、学習評価や授業評価のあり方などについて学習する。到達目標は、①保健体育科の良し授業について理解できる、②保健体育科の授業づくりや授業展開に関する知識やスキルを身につける、③保健体育科の学習計画について理解し、学習指導案を作成することができる、④保健体育科の学習評価や授業評価の基本的考え方について理解できることとする。 (オムニバス方式/全15回) ② 麻場一徳/8回 1～8回: 体育の学習指導についての基礎・基本的な事柄及び授業づくりや授業展開の知識やスキルについて ⑦ 下村義夫/7回 9～15回: 保健の学習指導についての基礎・基本的な事柄及び授業づくりや授業展開の知識やスキルについて	オムニバス方式	
	体育科内容・指導論1 (体育理論)	本授業では、中学校及び高等学校における保健体育あるいは体育の教員を目指す者に必要な「体育理論」の知識と教育内容、指導法などを演習的に学ぶ中で、体育理論の授業のあり方について考える。到達目標は、①学習指導要領における体育理論の内容を理解するうえで必要となる運動・スポーツの基本的な知識や考え方を理解する、②学習指導要領における体育理論の内容を理解し、説明できるようにする、③学習指導要領における体育理論の内容に関連する課題を理解することとする。 (オムニバス方式/全15回) (15 笠野英弘/5回) 1～5回: 文化としてのスポーツの意義、スポーツの歴史 (19 荻山 靖/5回) 6～10回: 運動やスポーツの効果的な学習の仕方とその効果 (7 三本木温/5回) 11～15回: 豊かなスポーツライフの設計の仕方、運動・スポーツの安全な行い方	オムニバス方式	
	体育科内容・指導論2 (体育実技)	本授業では、中学校と高等学校の体育授業をマネジメントし、よりよい授業を展開するための実践力の育成をねらいとして、基礎技能の習得、教材の開発、学習指導案の作成のしかたなどを演習的に学ぶ中で、実技の授業のあり方について考える。特に、学習指導要領の体育分野で取り扱う内容の中から陸上競技、球技、野外活動について学ぶ。到達目標は、①陸上競技種目に関する技能を習得し、技術指導のコツを掴む、②球技種目の技能習得、試合運営、技能に応じたルールづくり、安全管理等の総合的な指導力を身につける、③体育授業および宿泊学習等で行われる野外活動の基礎技能を習得し、実践力と指導力を高める、④中学校と高等学校の体育授業のマネジメント力を高めることとする。 (オムニバス方式/全15回) (14 太田 涼/5回) 1～5回: 陸上競技を中心とした個人種目の授業のあり方 (18 安田 真/5回) 6～10回: バレーボールを中心とした球技種目の授業のあり方 (20 東山昌央/5回) 11～15回: 体育授業および宿泊学習等で行われる野外活動の授業のあり方	オムニバス方式	
	保健科内容・指導論	本授業では、中学校・高等学校における保健体育の教員免許を取得する者に必要な保健学習の専門的知識の深化、つまり教育内容の理解を深めながら、教材づくり・教授方法などの実際を学び、保健の授業のあり方や授業づくりを探究する。到達目標は、①保健学習への社会的要請や今日的課題を理解し説明できる、②学習指導要領における保健学習の内容について基本的かつ専門的知識を習得し、その内容や構成原理を説明できる、③楽しくてわかる保健の授業とはどのような授業なのか、教材・授業づくりについて説明でき、指導案を作成できることとする。		
	キ D 群 .. 教 ア 職 育 形 科 成 目 科 健 体 育 系			

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門教育形成科目	D群 教職(保健体育)系	学校保健学(小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む)	学校保健は、学校において、児童生徒等の健康の保持増進を図り、学校教育活動に必要な健康や安全への配慮を行い、自己や他者の健康の保持増進を図ることができるような能力を育成することを目的として、校長を中心として全教職員が協力連携して推進する活動である。学校保健活動の全容を把握し、今日的役割の重要性について理解する。到達目標は、①保健管理と保健教育の概要を理解する、②各種疾病(生活習慣病、感染症)の成因と予防方法について理解する、③学校安全や学校環境衛生活動や、保健室の役割について理解する、④心の健康問題や発達上の課題について知り、支援方法について理解する、⑤現代的な健康課題や、学校給食と食育について理解することとする。		
		衛生学(公衆衛生学を含む)	わが国は、世界でも有数の長寿国となったが、その分、皆が健康で幸福になったのか。一人ひとりの病気を治療し長く生きることができるように目指す臨床医学に対し、集団全体を対象に考える衛生学、公衆衛生学の視点から考えていく。さらに、あふれる健康に関する情報の中から重要なものを選び、それを多角的な視点で検証できるようになることを目指す。到達目標は、①広い視野で人の健康・幸福について考えることができるようになる、②健康に関する情報を正しく読み取ることができるようになる、③健康に深く関わる環境や社会について理解する、④保健・医療・福祉の現状と問題について理解することとする。		
	E群	キヤリア	スポーツ英語a1(会話)	スポーツ界の国際化が進む中、外国人の競技者が合宿および公式試合のために来日することが多い。また、日本人選手も海外での活動が増えている。外国人とスポーツ現場でのコミュニケーション能力を向上させることが競技力向上および外国人選手に対する理解力を高めることに繋がる。この授業を通じて、様々なチームスポーツにおける英語の聞き取り能力および自己表現能力を高めることを目指す。到達目標は、①様々なチームスポーツの専門用語の理解及び聞き取り能力を高める、②チームスポーツ現場での英語での表現能力を高めることとする。	
			スポーツ英語a2(会話)	スポーツ界の国際化が進む中、外国人の競技者が合宿および公式試合のために来日することが多い。また、日本人選手も海外での活動が増えている。外国人とスポーツ現場でのコミュニケーション能力を向上させることは、競技力向上および外国人選手に対する理解力を高めることに繋がる。この授業を通じて、様々な個人スポーツにおける英語の聞き取り能力および自己表現能力を高めることを目指す。到達目標は、①様々な個人スポーツの専門用語の理解および聞き取り能力を高める、②個人スポーツの現場での英語の表現能力を高めることとする。	
			スポーツ英語a3(会話)	競技スポーツに関わる中でも、英会話能力が必要になる状況が増えて来ている。身体に関する表現や言葉を盛り込みながら会話を進めれば、コミュニケーションがもっと容易になるであろう。映画のフレーズや、スポーツにおいて使われやすいフレーズを盛り込みながら、英会話力の基礎を習得する。到達目標は、①英会話を聞き取れるようになる、②英語で挨拶ができるようになる、③体の調子を英語で伝えることができるようになることとする。	
			スポーツ英語a4(会話)	怪我をすれば、何が起こったのかを伝えたり聞いたりして対応しなければならない。チーム全体に指示を出して動いてもらうこともあれば、連絡事項をチームや選手に伝えることもある。スポーツの中で使われやすい場面を想定した内容にアレンジして英会話を学んでいく。到達目標は、①怪我をした際に状況や状態を伝えることができる、②緊急事態の際に対応できる、③試合や練習に必要な会話ができることとする。	
		英語系	スポーツ英語b1(読解)	スポーツ実践に役立つ情報は、英語文献において多く存在しており、優れたスポーツ実践を達成するためには英語読解が不可欠である。本授業では、英語文献を講読する前段階として、基本的な単語、文法を取得する。さらに、競技スポーツから学校体育、地域スポーツ、健康や福祉など、幅広く体育・スポーツに関する新聞や雑誌記事を講読することで、英語文章に慣れ、読解のコツを身に付けることを目指す。到達目標は、①基本的な英語用語になれる、②英語文章になれる、③英語読解に必要な、基本知識を身に付ける、④スポーツ科学に関する専門書を読解するための、読解のコツを身に付けることとする。	
			スポーツ英語b2(読解)	スポーツ実践に役立つ情報は、英語文献において多く存在しており、優れたスポーツ実践を達成するためには英語読解が不可欠である。本授業では、トレーニング・コーチングに関する英語文献を読み、専門的な情報を得るための基本的な英語力を身につける。さらに、海外文献に存在するスポーツ実践に役立つ情報を理解する。そのために、様々な種目に共通するトレーニングやコーチングに関する英語文献(書籍や雑誌記事、論文)の構造を理解し、専門種目や興味関心のある英語文献を検索できること、それについての内容の共有を目指す。到達目標は、①英語文献の検索ができるようになる、②英語論文の構造を理解する、③トレーニング・コーチングに関する基本的な英語用語になれる、④トレーニング・コーチングに関する英語文献の文章になれ、コツを身に付けることとする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	E群 キャリアスポーツ英語系	スポーツ英語b3 (読解)	トレーニング方法などのスポーツ競技力向上を目的とした情報収集を実施する際には、様々な情報の中から、科学的根拠、すなわち実験や調査などの研究結果から導かれた裏付けのあるものを選択することが重要となる。本授業では、スポーツ科学研究論文 (特にスポーツ生理学及びトレーニング科学分野) の検索法を紹介するとともに、受講者の興味・関心に応じた論文概要 (abstract) の読解を通して、専門用語を学ぶ。到達目標は、①スポーツ科学研究論文の検索法を身に付ける、②スポーツ科学研究論文の基本的な構成を理解する、③スポーツ科学研究論文の専門用語を学ぶ、④スポーツ科学研究論文の概要を速読できるようになることとする。	
		スポーツ英語b4 (読解)	野球・バスケットボール・サッカー・ホッケーなどの球技スポーツや、柔道・剣道などの日本の伝統的なスポーツ、あるいは「心・技・体」にかかわるトレーニング方法などの海外で発刊されたテキストを基にして英語の読解力を高めることとする。到達目標は、①英語を通してスポーツ種目や日本の伝統的なスポーツを深く理解する、②スポーツに関する専門用語を習得することとする。	
教職専門に関する科目	教職に 関する 科目	教職概論	この授業は、全ての教職科目の中で、最も基礎的な科目の一つとして、教育とは何か、現代社会における教育はどのように展開されているのか、教育という営みをどう捉え、どのように考えたらよいか、ということや学び考えることを目的としている。次に教育の重要な担い手である教師についても学ぶ必要がある。教師の仕事は、子どもの成長発達を助ける営みであることは言うまでもない。子どもたちが一人の人間として、どのように育てるのか、といった人間形成に関わる営みであるということである。そして、人間形成とは、現代社会における教育の意義・教師の役割をふまえ、子どもの可能性を引き出し伸ばすことを基本理念として営まれるべきである。そして、この点にことが学校や教師の存在を支える根拠であるのである。以上を理解することが、本授業の最大の目的である。	
		子どもの発達と社会Ⅰ	子どもを把握するための視点を大別すると「子どもとは」という根源的な問いに対する回答を模索する場合と、現実的・日常的に生活を続ける現象的な側面を理解しようとする場合とがある。一方では歴史的にどのような変遷をたどってきたか、民俗学的・歴史的・社会的な観点から観察・記録された子どもの様々な在り様である。、他方では、心理学・教育学的観点から子どもの家庭生活や学校生活、遊びや文化、友人関係などに関する研究の蓄積がなされている。これらの研究を手がかりとして子どものいろいろな側面、「子どもとは」について考えたい。	
		子どもの発達と社会Ⅱ	青少年期について、レジメなどの配布資料により様々な問題を理解し、教育の対象者である青少年期とはどのような発達上の問題があるのか理解を深める。そして現状のデータから考え方、視点についてもあわせて学ぶ。東日本大震災といった事例から防災意識について、伝統社会の子どもや子ども文化、児童労働、子どもの遊びについてなどを学び、社会的な視点から学習を進めます。また、共に子どもの病理問題すなわち非行や犯罪、いじめや暴力など現代社会における子どもを取り巻くさまざまな問題を考える。さらに、情報社会と若者との関係、友人関係やモラルなど、青年期の問題について一つ一つのテーマをてがかりとして考えていく。子どもや青年期についてどう考え対応すべきかについて、把握する。	
		教育史	この授業では、教育の基礎的な理念や人間形成において不可欠な理念について学ぶとともに、日本における教育の歴史について概観し、現在の教育改革を歴史的に考察できる力を育成する。また、主な世界的な教育思想家についても取り上げ、それぞれの教育思想の特徴を把握し、現在の教育を思想的に考察できる力を養う。到達目標として掲げるのは、以下の3点である。 ①教育および人間形成の基礎的な理念を習得すること。 ②教育改革を歴史的に考察できる力を育成すること。 ③教育思想の特徴を思想的に把握すること。	
		教育課程論	教育課程、すなわちカリキュラムとは、学校の全体教育計画のことであり、各学校で編成されるものである。文部科学省が定めた学習指導要領や各法令に基づいて、学校が立てる教育計画である。教育計画とは一言で言えば、子どもたちの学びの経験であり、教室で日々創造されるものである。本授業では、学習指導要領の理解、教育課程の意味、教育課程の歴史と変遷、教科書、かかれたカリキュラム、教育課程の評価などを中心に学ぶ。学習指導要領を良く理解すること、また、教育課程の意義を理解することを、到達目標とする。	
		道徳教育指導論	本授業では、道徳教育に関する基礎的な概念・事項を理解し、児童生徒の人格形成に与える意義についての理解を深める。具体的には、次に示す3点を行う。①学校教育における道徳教育の意義、道徳教育の目標・内容、指導計画等について学習指導要領を分析しながら理解を深める。②道徳教育に関する議論について、歴史的変遷を踏まえながら考察する。③道徳の代表的な指導理論の概要について理解し、実際に授業設計及び模擬授業を行う。また、本授業では、ペア・ディスカッションやグループ・ディスカッションなどのアクティブ・ラーニングを積極的に導入していく。到達目標は、①学校教育における道徳教育の意義についての理解を深めることができる、②道徳教育に関する議論の歴史的変遷について考察することができる、③道徳の指導理論の概要について理解し、実際に道徳の時間の授業設計を行うことができることとする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職専門科目	特別活動論	「特別活動」は、中学校あるいは高等学校における教育課程の一つとして設けられたもので、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてより良い生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方、生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」ことが目標とされている。日常的なホームルーム活動や生徒会活動、始業式・終業式あるいは入学式・卒業式などの式典、あるいは文化祭、体育祭、研修旅行などに主体的・積極的に参加することをとおして、組織集団の一員としての力を培うことが生徒たちに期待されている。そこで、この授業においては、履修者自身の市民的能力・資質の形成・向上にも貢献することを目指しつつ、「特別活動」の意味と方法について共に考えていくこととする。授業では、「特別活動」の意義、歴史、方法などの概要に触れつつ、いくつかの「活動」領域に関する具体的方法論について、履修者の主体的な学習を通して検討する。到達目標は、①特別活動の意義について説明できるようになること、②自分の意見をまとめる能力や他者に対する説得力を高めつつ、他者と協力しながら主体的に課題を進めてゆく能力を高めること、③「正答」の無い課題に柔軟に対処する力を高めることとする。	
	教育方法論	本授業では、教育方法を学ぶことの意義や教育方法の基本的知識、情報機器の種類と活用法についての理解を図りながら、1時間の授業を設計するために必要となる、①授業の到達目標、②指導内容及び指導方法、③評価方法について、具体的な学習指導案や関連資料をもとに理解を深めていく。その上で、現行学習指導要領における授業の方向性を理解し、実際に授業設計と模擬授業を行ったり、授業検討会を行ったりすることを通して、授業の計画・実施・評価・改善の方法や授業分析の視点についての理解を深め、授業設計における実践的な力を育成する。また、本授業では、ペア・ディスカッションやグループ・ディスカッションなどのアクティブ・ラーニングを積極的に設定していく。到達目標は、①教育方法を学ぶことの意義や教育方法の基本的知識、情報機器の種類と具体的活用法について理解することができる、②現行学習指導要領における授業の方向性を理解することができる、③1時間の授業設計に必要な事項について、学習指導案及び関連資料をもとに理解することができる、④実際に授業設計と模擬授業を行ったり、授業分析を行ったりすることを通して、実践的な授業の計画・実施・評価・改善の方法や授業分析の視点について理解することができることとする。	
	生徒指導・教育相談	生徒指導・教育相談は、教科教育とならんで学校教育の重要な柱である。まず生徒指導を原理的に考察し、戦後の生徒指導の理論と実践の足跡を辿る。それから現在の子どもが直面する諸問題を検討する。それを踏まえ教育相談（カウンセリングを含む）の基礎理論及び具体的方法、事例を学んでいく。到達目標は、生徒指導・教育相談の基礎理論を学び、それを踏まえて、戦後の生徒指導の歴史をたどり、現代直面する諸課題とその解決に向けた試みを理解することとする。	
	進路指導論	学校教育の重要な柱である進路指導の歴史、特に近年急速に重視されつつあるキャリア教育の理論と実践、直面する課題について学習する。まずは、子ども・青年の進路状況、労働実態を学び、キャリア教育が必要とされる背景を学ぶ。そしてキャリア教育の理論と方法、実践例を学び、最後に生徒が生きること、働くこと、学ぶことを統一的に把握できる進路指導、キャリア教育のありかたを学ぶ。到達目標は、生徒の社会的・職業的自立に向けた指導を行う進路指導やキャリア教育の理論と実践について学習する。現代学校における進路指導・キャリア教育の意義、その理論と実践について学習する。生徒が主人公となる権利としての進路指導について創造的に考えることができるようになる。	
	教育実習研修	中学校・高等学校の教諭を目指すにあたり、必修である教育実習の実践に向けて、教科指導や生徒指導など教育現場に向かう資質を養い、実習生としての立場や責任について自覚を高める。また、実習に向かう自己課題を設定し、教壇に立つ基礎的な準備として教材研究や学習指導案の作成、模擬授業など実践研修を行う。終了後は実習の体験報告や、体験に基づく学校教育の現状と課題について討議し、実習に対する自己評価を行う。到達目標は、①教科指導や生徒指導など、実習を前に教育現場に向かう心構えや責任が自覚できる、②教材研究や学習指導案の作成、授業展開の実際など、授業実践の基礎的な方法を身に付ける、③学校教育の現状と課題について議論できる、④教諭を目指す上で求められる資質や能力を高めることとする。	
	教育実習Ⅰ	中学校・高等学校の教諭を目指す者が、学校現場において教科指導や生徒指導など、現役教師が指導する場面の観察や研究を行う。実習校で担当教師から、教材研究や学習指導案の作成、授業展開の実際など、授業実践における基礎的な指導を受け、授業における指導を自ら実践する。さらに、特別活動や学級活動など様々な教科外活動について体験する。到達目標は、①教育現場での指導について観察、研究し学校教育について理解する、②教科指導や生徒指導をとおして、教師に求められる心構えや責任について学ぶ、③教科の目標と領域内容に即した学習指導案の作成ができ、適切に授業を行うことができる、④教科外活動の実際など、学校で行われる様々な基礎的指導について学ぶ、⑤学校教育の現状と課題を研究し、発表することができることとする。	集中
	教育実習Ⅱ	中学校の教諭を目指す者が、学校現場において教科指導や生徒指導など、現役教師が指導する場面の観察や研究を行う。実習校で担当教師から、教材研究や学習指導案の作成、授業展開の実際など、授業実践における基礎的な指導を受け、授業における指導を自ら実践する。さらに、特別活動や学級活動など様々な教科外活動について体験する。到達目標は、①教育現場での指導について観察、研究し学校教育について理解する、②教科指導や生徒指導をとおして、教師に求められる心構えや責任について学ぶ、③教科の目標と領域内容に即した学習指導案の作成ができ、適切に授業を行うことができる、④教科外活動の実際など、学校で行われる様々な基礎的指導について学ぶ、⑤学校教育の現状と課題を研究し、発表することができることとする。	集中
	教職実践演習（中・高）	本演習は、教職課程の授業科目の履修や教育実習、教職課程外での様々な活動を通じて、一人一人が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され形成されたかを、意見交換・グループ討議・ロールプレイング、フィールドワークなどとおして最終的に確認する。さらに、教員になる上で何が課題かを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能を補い、その定着を図る。到達目標は、教員として求められる以下の事項が形成されていることとする。 ① 使命感や責任感、教育的愛情に関する事項 ② 社会性や対人関係能力に関する事項 ③ 生徒理解や学級経営等に関する事項 ④ 教科内容等の指導力に関する事項	